

青葉通仙台駅前エリア
未来ビジョン

Aoba-dori Sendai Station Area
Future Vision from 2025

仙台の顔、多彩な表情のあるエリアへ

The Face of Sendai : Towards a District of Diverse Expressions



青葉通仙台駅前エリア 未来ビジョン

仙台の顔、多彩な表情のあるエリアへ

—

Aoba-dori Sendai Station Area Future Vision

The Face of Sendai :
Towards a District of Diverse Expressions



はじめに

青葉通仙台駅前エリアの未来を描くために
大切なことって何だろう？

かつて、伊達政宗公を筆頭に、人々が築いた仙台。
戦災によって焼失したまちに、人々が造った青葉通。
震災、コロナ禍、未曾有の事態を幾度も経てもなお、
青葉通仙台駅前エリアは人々によって守られ、発展してきました。

今日、このエリアは、交通・経済・文化が共存し
様々な人々が行き交っています。
互いに影響を受け合いながら絶えず変化している様は
まるでグラデーションのようです。

グラデーションを生み出す「人々」は
たくさんの「ひと」からできています。
その一人ひとりの「ヒューマニティ」、
思いや考えや振る舞いがこのエリアを大きく変えるはずです。

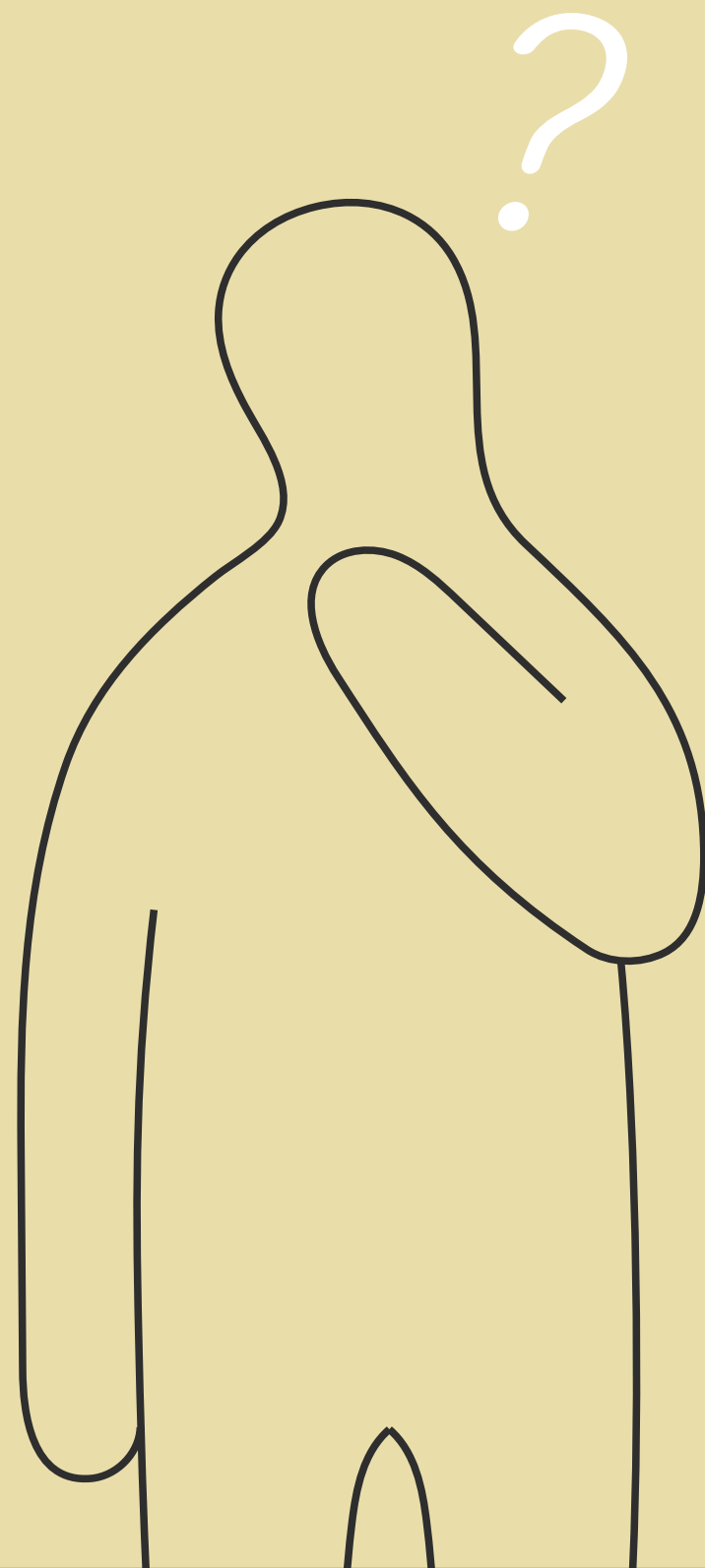
今、青葉通仙台駅前エリアは、
未来へのスタートラインに立っています。

「青葉通仙台駅前エリアの未来を描くために
大切なことって何だろう？」

これから先、何度も立ち止まって考えるであろうこの問いに
「グラデーション」と「ヒューマニティ」が
道標になると信じて、歩きはじめます。

未来ビジョンとは

What is the future vision?



私たち「青葉通駅前エリアのあり方検討協議会」は、学識経験者、商工関係者、沿道地権者、交通事業者、仙台市で構成している組織です。

このエリアを中心に、公共空間のあり方について官民が連携して検討を進めていくために、令和3年（2021年）6月に発足しました。協議会での議論をはじめ、市民参画イベントでの意見や社会実験の知見を踏まえて検討を重ねた内容を理念としてまとめたものが、この『青葉通仙台駅前エリア未来ビジョン』です。

未来ビジョンは描いて終わりではなく、実現するために取り組みを進めていくことが大切です。

まずは、この冊子を手にとってくださったあなたにもエリアの未来を想像していただくために、未来ビジョンを共有するところからはじめます。

02	はじめに
04	未来ビジョンとは
08	青葉通の変遷
16	対象エリア
18	このエリアと周辺エリアの特性
22	このエリアの果たすべき役割
24	未来ビジョンの概念図
26	このエリアで大切にすること
28	ビジョン
30	エリアにヒューマニティが生まれる光景
34	ビジョンの実現に向けて
36	このエリアの未来を考える座談会

44	資料編について
46	協議会のあゆみ（年表）
48	協議会のあゆみ（2021–2022）
50	エリアづくりに向けた3つの視点（2021）
51	エリアに求められる機能（2021）
52	市民参画イベント MACHITO SENDAI（2022）
56	青葉通仙台駅前エリア社会実験 MOVE MOVE(2022)
60	協議会のあゆみ（2023–2025）
62	社会実験後のつながりづくり（2023–）
64	MOVE MOVE ARCHIVE BOOK（2024）
66	MOVE MOVE ARCHIVE BOOK 〈意見交換会を通して見えたこと〉
68	トークイベント「居心地の良いまちって何だろう？」（2024）
70	協議会の開催状況
72	未来ビジョンのとりまとめ（2025）
74	エリアの果たすべき役割に関する補足

1946年から戦災復興事業の目玉として、戦災で焼失した城下町の屋敷跡に道路が整備されました。仙台駅前から東二番丁通までは幅員50mとなり、その広さから「飛行機の滑走路でも作るの!？」と市民に驚かれたといいます。この通りの名称が河北新報社の市民公募で決まり、「青葉通」となりました。





SONYの大看板が目を引く建物は、「さくら野百貨店」の前身「丸光百貨店」です。屋上には遊園地もあり、家族連れで賑わいました。通りの左側にあるのは、東北地方初の洋式ホテルとして開業した「仙台ホテル」。皇族やアインシュタインも泊まったという、当時最も格式高いホテルでした。



2009年に仙台ホテルが閉館し、後に都市型商業施設「EDEN」が開業。2017年には、さくら野百貨店が閉店しました。

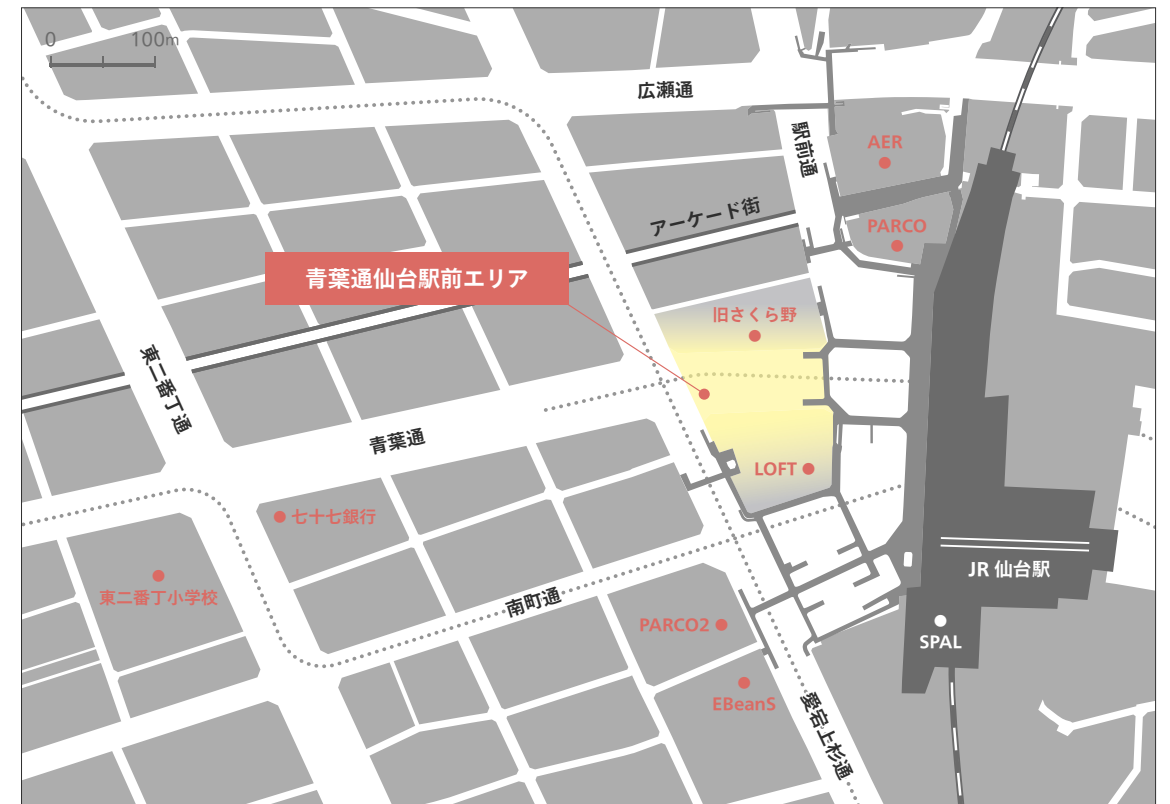


2020年、仙台ホテル、さくら野百貨店の敷地で沿道開発の機運が高まりました。翌年、このエリアの公共空間のあり方を検討する官民連携の組織「青葉通駅前エリアのあり方検討協議会」を設立し、2022年には、このエリアのビジョン策定に向けた社会実験「MOVE MOVE」が仙台市主催で行われました。そして2025年、このエリアの未来ビジョンを策定し、未来に向けた取り組みが進んでいます。

対象エリア

Target Area.

未来ビジョンで「青葉通仙台駅前エリア」と呼ぶエリアは、青葉通にあり、仙台駅に隣接しています。駅に降り立つ人の目に入り、仙台の第一印象を決める「仙台の顔」となるべき空間です。青葉通はここから青葉山へと伸びており、杜の都を象徴するケヤキ並木が立ち並ぶ、仙台を代表するシンボルロードの一つです。



このエリアと周辺エリアの特性

Characteristics of the area around the target area.

このエリアと周辺エリアには、3つの特性があります。

特性①

仙台を印象付ける、まちなかや青葉山につながる「仙台の顔」

このエリアは、青葉通の風格があるケヤキ並木をはじめ、仙台の第一印象を決める「仙台の顔」としての象徴的な特性があります。また、アーケード街、定禅寺通をはじめとしたまちなかや青葉山、東北各地へとつながる特性もあります。

特性②

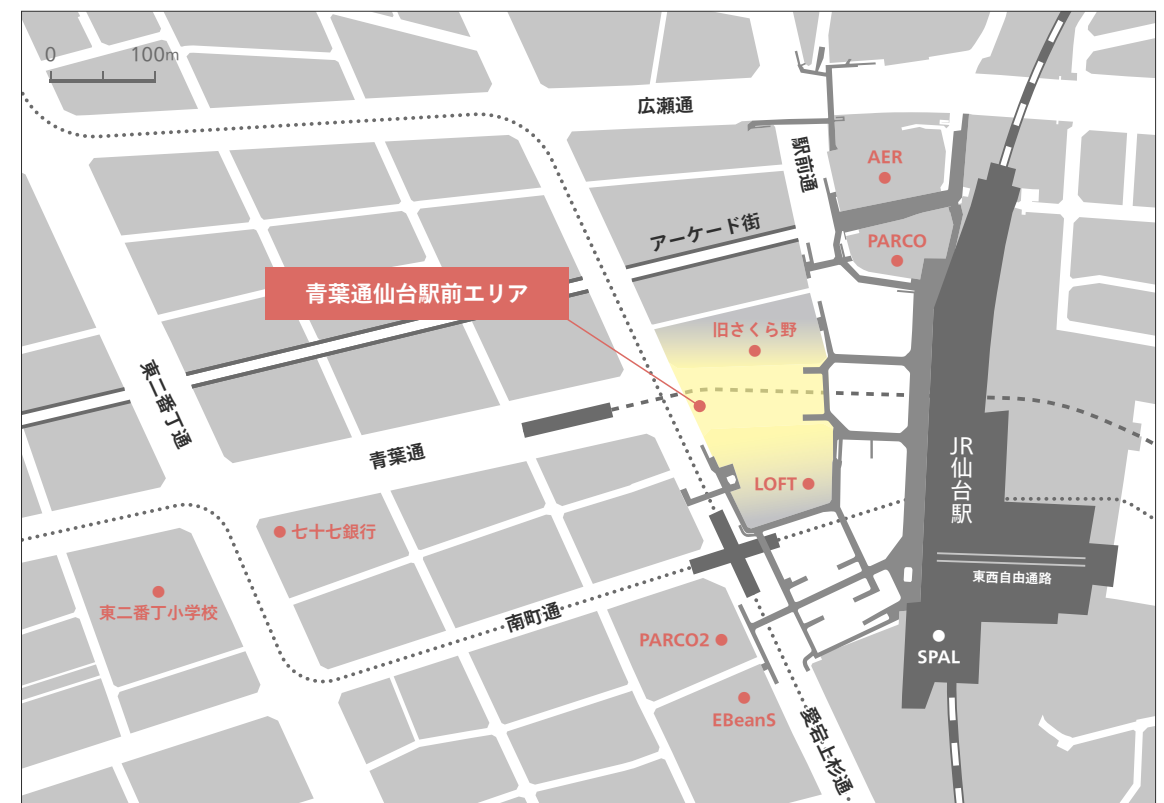
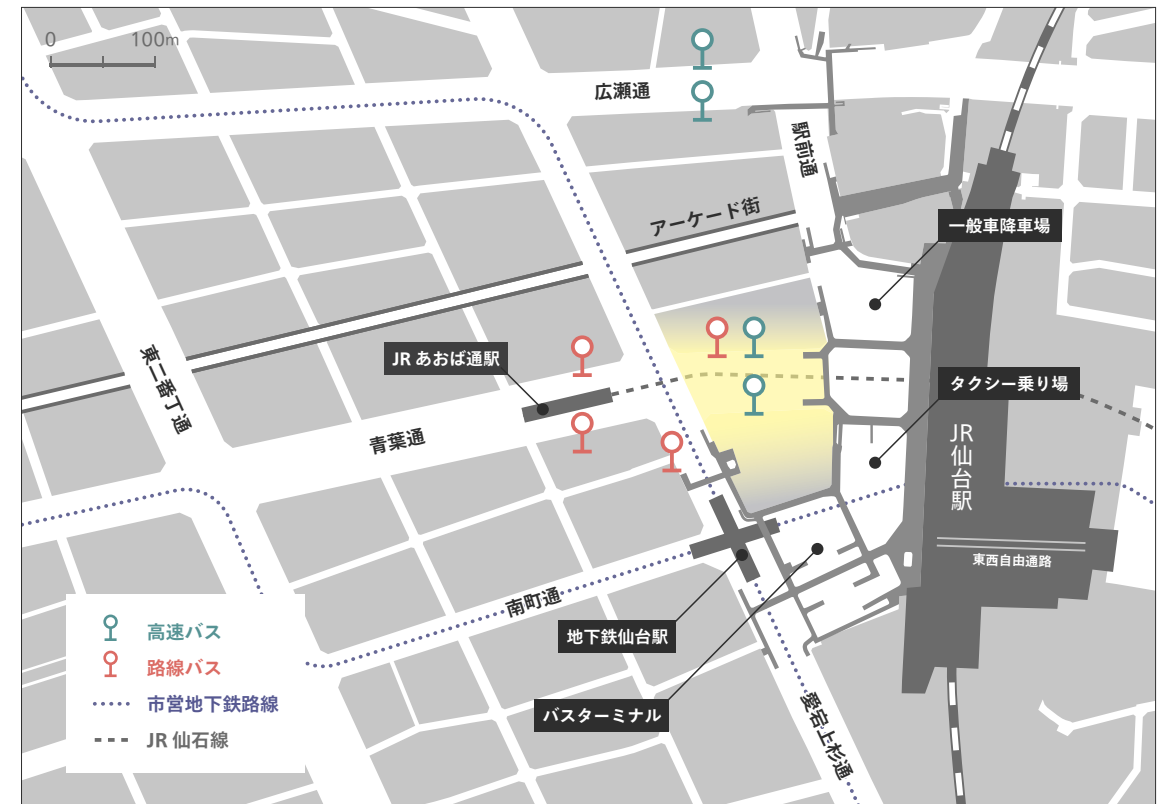
交通・経済・文化といった要素の異なる価値が共存

このエリアと周辺エリアは、鉄道やバス、タクシーが集まる交通結節点であるとともに、ファッションやサブカルチャーの店舗を含む多様な商業施設、オフィスが集まっており、交通・経済・文化といった要素の異なる価値が共存しています。

特性③

様々な人が行き交う

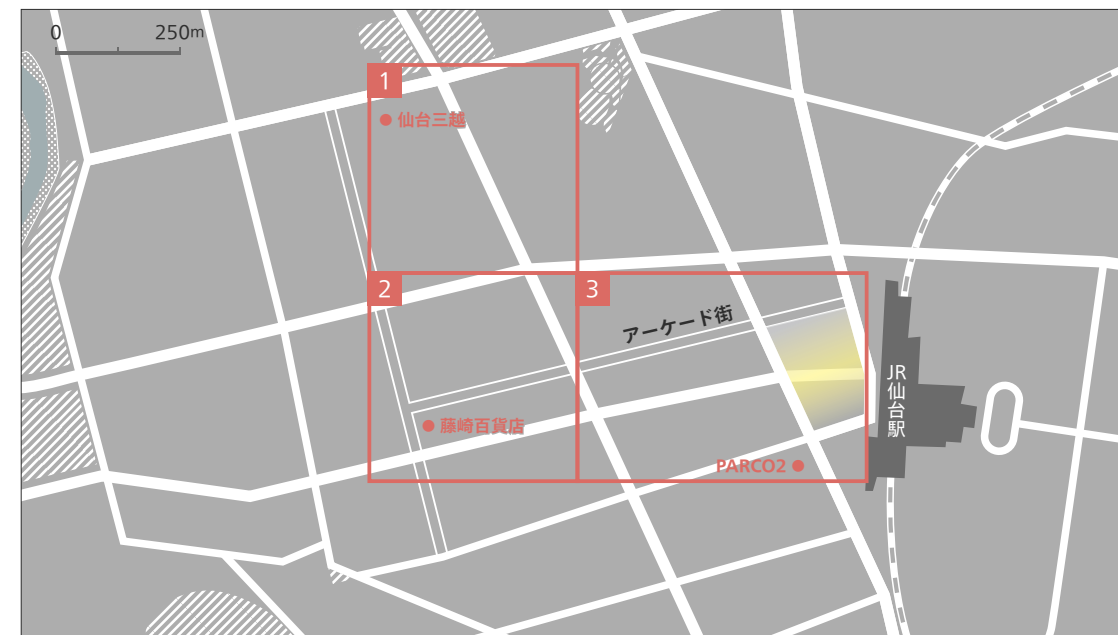
このエリアとその周辺には、仙台駅東西自由通路とペDESTリアンデッキがあり、まちなかで最も様々な人が行き交っています。まちなかの他エリアと比較して、特に10代～30代の若い世代が多く集まっています。



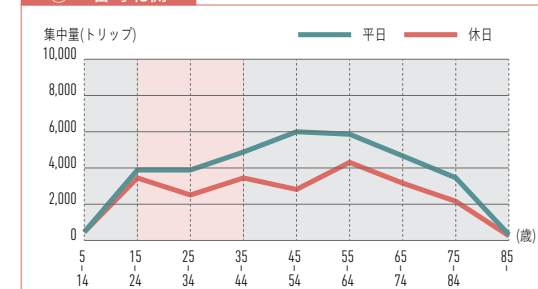


様々な人が行き交う

このエリアとその周辺には、仙台駅東西自由通路とペDESTリアンデッキがあり、まちなかで最も様々な人が行き交っています。まちなかの他エリアと比較して、特に10代から30代の若い世代が多く集まっています。



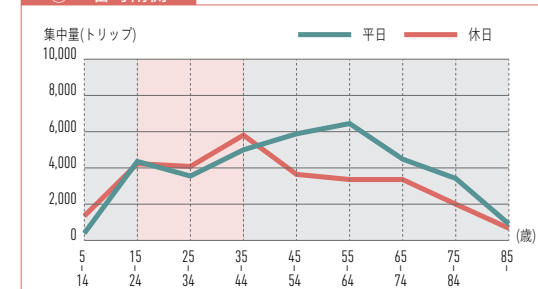
① 一番町北側



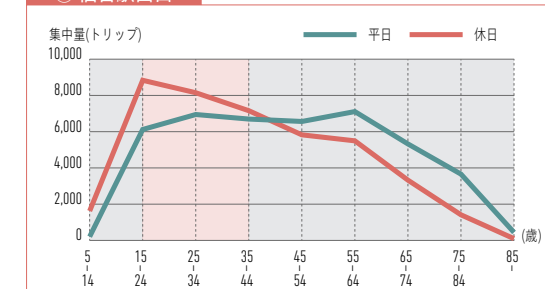
グラフ：都心着トリップのメッシュ別年齢層構成

＊2017年(平成29年)10月～12月の実施データを元に作成。

② 一番町南側



③ 仙台駅西口



まとめ

このエリアは「仙台の顔」であり、交通・経済・文化といった要素の異なる価値が共存する多面的価値があります。その上で、様々な人が行き交っています。これら3つの特性をいかすことにより、エリアと周辺エリアの価値を向上させるポテンシャルがあるといえます。

このエリアの果たすべき役割

Characteristics of the area around the target area.

このエリアとその周辺の特徴である多面的な価値を踏まえ、
このエリアが果たすべき役割は3つあります。

役割①

「ひと中心」のゆたかな表情を生み、仙台の印象を創り出す

仙台駅に降り立った人が目にしやすく、「仙台の顔」として印象を与えるエリアです。従来のこのエリアは、交通利便性を重視した利用が中心でしたが、今後は沿道開発と一体となり、ひとの活動、交流、滞在を盛んにして「仙台の顔」としての表情を生み出し、様々な人を惹きつけることが必要です。

役割②

訪れる人が他エリアへ回遊できる起点となる

アーケード街や定禅寺通などのまちなか、青葉山といった魅力的なエリアへ回遊してもらう起点となるためには、このエリア自体の魅力を高めて惹きつけ、訪れる人を増やすことが必要です。それにより、ペDESTリアンデッキや仙台駅東西自由通路を利用する人々に加え、郊外の大規模商業施設を訪れる機会が多い子育て世代など、まちなかに訪れる機会の少ない層にも足を運んでもらうことが期待できます。また、このエリアに戻ってきた時に、改めて仙台に対しての印象を深めることができ、再訪にもつながると考えます。

役割③

様々な人が多面的価値をいかして挑戦できる場となる

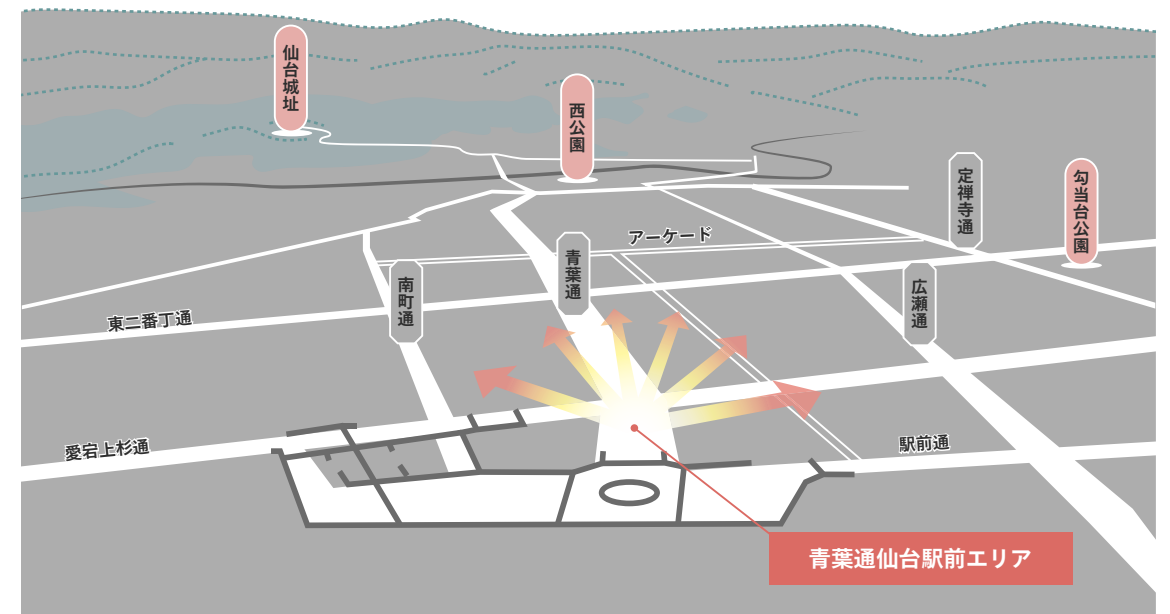
このエリアに関わる様々な人が交通・経済・文化といった多面的な価値をいかし挑戦できる場になることで、エリア価値の向上につなげることが必要です。

まとめ

これら3つの果たすべき役割を担うことで、エリア価値が向上し、様々な人にとって魅力的なエリアになります。

ペDESTリアンデッキから青葉山方面を見た鳥瞰図

回遊の広がり



未来ビジョンの概念図

Diagram of our vision.

これまでに示した特性や役割を踏まえ、
青葉通仙台駅前エリアのビジョンを掲げます。

土台となる2つの背景

1. 「多元的価値」のあるエリアの特性

特性1) 仙台を印象付ける、まちなかや青葉山につながる「仙台の顔」

特性2) 交通・経済・文化といった要素の異なる価値が共存

特性3) 様々な人が行き交う

2. このエリアが果たすべき3つの役割

役割1) 「ひと中心」のゆたかな表情を生み、仙台の印象を創り出す

役割2) 訪れる人が他エリアへ回遊できる起点となる

役割3) 様々な人が多元的価値をいかして挑戦できる場となる

未来ビジョンの基盤となる思想

エリアの特性をいかし、役割を果たすためには、単なる空間整備や機能配置だけでは不十分です。様々な人が集まり、異なる価値が共存するこのエリアでは、それらをどのように調和させ、相乗効果を生み出していきたいのか、基盤となる思想が必要です。

また、従来のエリアづくりでは、経済効率や利便性が重視され、ひとの感情や体験、つながりといった人間本来の豊かさが置き去りにされがちでした。このエリアのように様々な人が行き交う場所では、ひとの心理や行動に配慮したエリアづくりが不可欠です。

従って、このエリアで大切にしたい2つのこととして、多様な価値を前向きに融合させる「グラデーション・ポジティブの心構え」と、人々の感情やつながりといった「ヒューマニティを大切にしたい考え方」を掲げ、未来ビジョンの実現を目指します。

このエリアで大切にしたい2つのこと

その1.

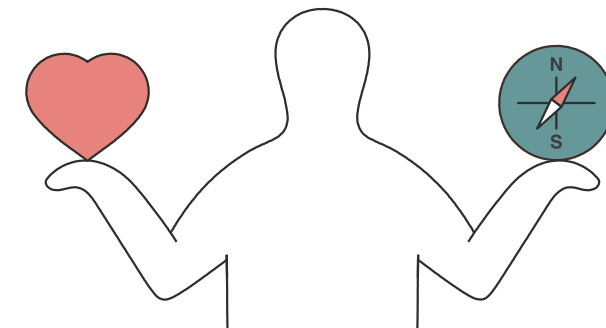
グラデーション・ポジティブの心構え

異なる価値が共存する多面的価値や変化に対して寛容さと柔軟さを持ち、いかしあうことで新たな価値を生み出せるよう前向きに挑戦しようとする心構え

その2.

ヒューマニティを大切にしたい考え方

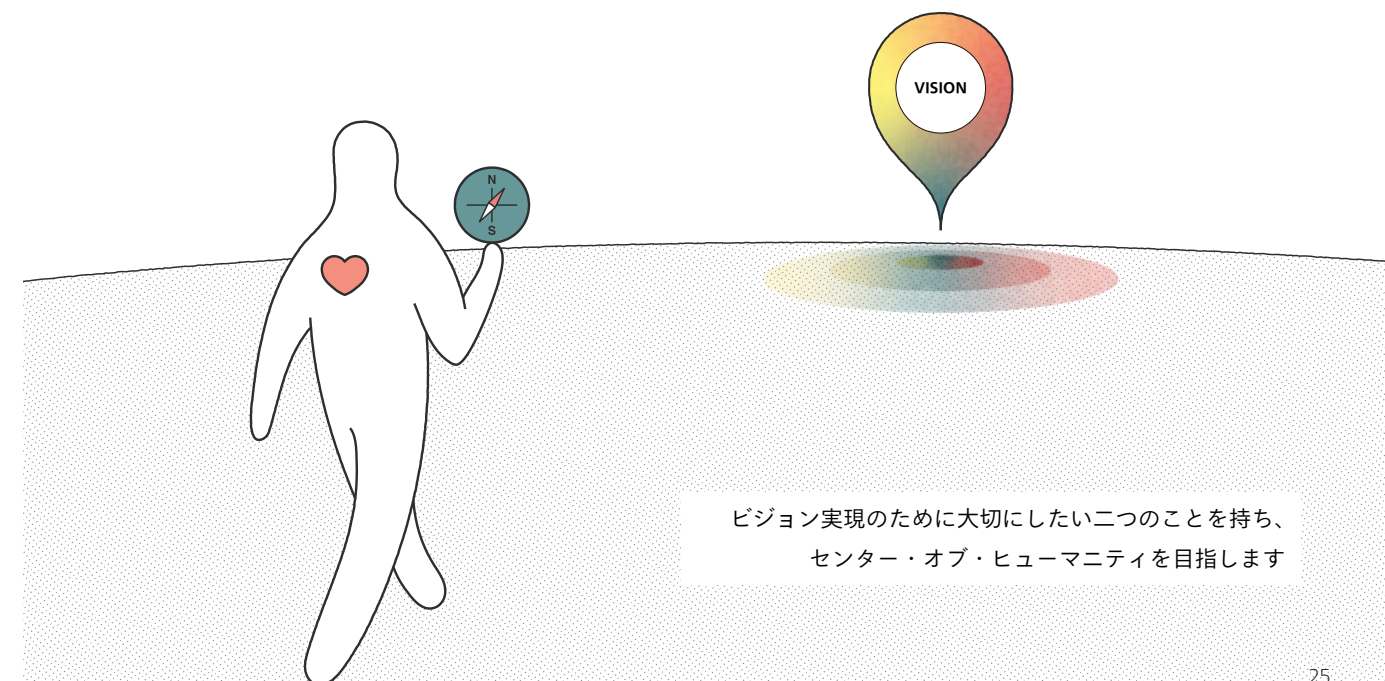
ひとの感情、人間性、ひととのつながり、すなわちヒューマニティを大切にしたいという考え方



ビジョン

センター・オブ・ヒューマニティ

あらゆるゆたかさが生まれ、仙台への愛着の起点となる唯一無二の場所



ビジョン実現のために大切にしたい二つのことを持ち、
センター・オブ・ヒューマニティを目指します

グラデーション・ポジティブの心構え

Gradation-Positive.

多元的価値や変化に対して寛容さと柔軟さを持ち、
いかしあうことに前向きに挑戦しようとする心構え



このエリアでは、二つのことを大切にします。
一つ目は、「グラデーション・ポジティブの心構え」です。

このエリアは、交通・経済・文化といった要素の異なる価値が共存する多元的価値があり、異なる目的を持つ様々な人が行き交い、環境が絶えず変化しています。

この特性をいかしてエリアの役割を果たすためには、多元的価値や変化に対して寛容さと柔軟さを持ち、いかしあうことに前向きに挑戦しようとする心構えが大切です。
これが、グラデーション・ポジティブの心構えです。

例えば、このエリアで事業を行う者がいます。
単独の取り組みでも利益を生み出し、エリアに経済効果を生み出す可能性はありますが、異なる価値観に寛容さと柔軟さを持って向き合い、異業種や異分野との連携に挑戦することでイノ

ベーションが生まれ、より大きな経済効果をもたらす可能性が上がります。

これは、経済効果だけではなく、異なる価値との出会いや新たな価値の創出などの好循環につながることも考えられます。

経済に良い循環が生まれると、さらに様々な人がこのエリアを訪れるようになり、交通機関や公共空間を利用する人が増加します。
交通機関や公共空間も、単独で利便性を向上させるだけではなく、グラデーション・ポジティブの心構えで多元的価値をいかしあうことで、快適さを向上させたり、文化が生まれたりする可能性も上がります。

このように、それぞれの価値がグラデーションのように重なったり連なったりして互いに良い影響を与えあうことで、エリアの価値向上にもつながります。

ヒューマニティを大切にすること

Humanity-Centered.

ひとの感情、人間性、ひととのつながり、
すなわちヒューマニティを大切にすること



このエリアで大切にすること、二つ目は、「ヒューマニティを大切にすること」です。これは、エリアづくりにおいて、ひとの感情、人間性、ひととのつながり、すなわちヒューマニティを大切にすることという考え方です。

例えば、このエリアを訪れた人のなかに「少し休みたい」と思ったひとがいるとします。エリアに座ることができる場所があったら、そこに座って休憩することができます。
ここまでは、従来のエリアづくりです。

では、「ゆったり寛ぎたい」と思うひとにとってはどうでしょうか。座れるスペースがあったとしても、人が密集していたり、騒がしかったりするとゆったり寛ぐことはできません。

同じエリアに居るひとの気配を感じながらも、他のひとからの視線は気にならず、パーソナルスペースを確保できる場所ならゆったり寛ぐことができるかもしれません。

この場所の色や質感、明るさ、音や香りも大切な要素です。

このようなエリアでは、居心地の良さや安心感から気持ちの余裕が生まれ、周りを眺めるなかでの新たな発見や近くにいるひととの会話、楽しさや喜びといったゆたかさを生み出します。

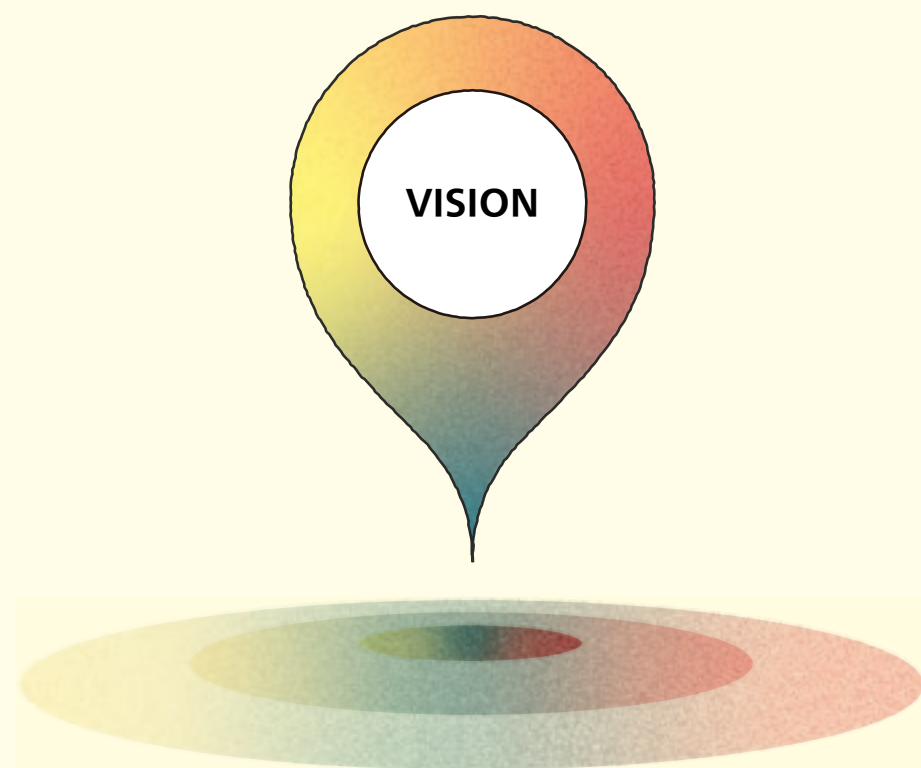
このエリアを通過するだけだったひとにも休憩や購買への欲求を生んだり、バスを待つために滞在しているひとが有意義な時間を過ごすことができたりと、経済や交通面でもゆたかさを生み出します。

このように、ひとがどのような感情でどのように行動するかと連動してエリアの状態も変化します。その結果、あらゆるゆたかさが生まれ、エリアはより良い状態となり、エリアの価値向上にもつながります。

ビジョン

センター・オブ・ヒューマニティ

The Center of Humanity.



あらゆるゆたかさが生まれ、
仙台への愛着の起点となる唯一無二の場所

グラデーション・ポジティブの心構えとヒューマニティを大切にする考え方で目指していく青葉通仙台駅前エリアのビジョンが「センター・オブ・ヒューマニティ」。

多角的価値をいかしあい、あらゆるゆたかさが生まれ、仙台への愛着の起点となる唯一無二の場所です。

あらゆるゆたかさが生まれる中心になることで、このエリアに集まるひとの記憶に残る体験が生まれ、それがエリアへの愛着、ひいては仙台への愛着の起点となります。その愛着は、ひととの繋がりの中で相互に良い影響を及ぼし合いながら、さらにまちなかへとひろがっていきます。

未来ビジョンに向かう過程で、エリアとして求められることも環境も変化していきますが、「ヒューマニティ」は普遍的です。普遍的でありながら、エリアのひとの数だけ「ヒューマニティ」の答えがあって良い。

ヒューマニティを大切にしながらあらゆるゆたかさを生み出し続けていくことで、このエリアは仙台への愛着の起点として、唯一無二の場所になるのです。

エリアにヒューマニティが生まれる光景 Future Scenes Filled with Humanity.



仕事終わりの リフレッシュ

シンイチ（仙台駅前会社勤務・42歳）

シンイチは、激務で気持ちが休まらない日々を過ごしている。残業後、コンビニに寄りバス停に向かう時、目に入ったこのエリアに立ち寄ってみることにした。空いているスペースに腰掛け周りを見渡すと、人々が寛いで談笑している。見上げると、沿道のケヤキ並木が風に揺れて心地良く思わず深呼吸した。バスが来るまで少しここで過ごそう。缶ビールが最近で一番美味しい。



放課後のひととき

アヤナ・ミク（青葉区の高校2年生）

アヤナは、ミクの部活後に仙台駅前で会うことになった。駅前にはたくさんお店があるけれど、毎回入るのは正直お小遣いのキツイ。すると、ミクから「ペデストリアンデッキを降りてすぐの青葉通にいるよ」と連絡が。行ってみると開放的な場所。練習終わりのミクが涼んでいる姿があまりに気持ち良さそうなので思わず写真に撮った。リラックスしてただ座って話せるのが嬉しい。

このエリアで実現したいヒューマニティが生まれる光景を、様々なひとにまつわる8つのストーリーと共に描きました。



買い物の合間の ひとやすみ

アサミ（主婦・29歳）
ヨシキ（夫・31歳）
アオ（息子・3歳）

アサミは、家族で家電を買いに仙台駅前に来た。買い物を済めるとアオがぐずり始めた。するとヨシキが「青葉通仙台駅前エリアで休めるみたい」と言うので行ってみる。そこでは家族連れも多く、子どもたちが走り回っていた。それを見たアオも駆け出す。「アオに目も届くし俺は休める。ゆっくりしてきていいよ」とヨシキ。アサミは久しぶりに自分のための買い物を楽しんだ。



観光で来た ひととの交流

トシロウ（70歳）

トシロウは散歩でよくこのエリアに立ち寄る。一息ついていると、バックパッカーに話しかけられた。サムライ文化が好きで伊達政宗像を見にフランスからやってきたという。スマホを駆使してカタコトの英語で伊達像の場所を教え、横丁の行きつけのお店も紹介した。「あなたのお陰で仙台がもっと好きになった」ととても喜んでくれ、SNSのアカウントを教え合った。

エリアにヒューマニティが生まれる光景 Future Scenes Filled with Humanity.



出張先での気づき

タカヒコ（東京勤務・45歳）
ササキ（仙台起業・37歳）

部下だったササキが会社を辞めリターンして仙台で起業した。仕事の相談があるというので、タカヒコは東京から仙台に赴く。打ち合わせに指定されたのはこのエリア。「駅前には常に変化していて、毎日違う風景が見られるのが刺激的なんです」とササキ。近くでは、学生が自分の研究について英語で話していて国際都市の雰囲気もある。新しいキャリアを仙台で考えるのも良いかもしれない。



学びの機会

ミン（中国人留学生・24歳）
ヨシダ（大学教授・50歳）

ミンは、駅前の沿道ビルで全国から研究者や学生が集まる研究発表会に参加した。発表後に多分野の研究をしている他大学のヨシダ教授と話が盛り上がる。教授が乗る帰りの新幹線までの時間、このエリアで話し込んだ。交流機会があり、ひとと話して学べる環境がある仙台はとても楽しい。

このエリアで実現したいヒューマニティが生まれる光景を、様々なひとにまつわる8つのストーリーと共に描きました。



子育ての余白

コウタ（フリーランス・33歳）
アイ（娘・4歳）

仕事終わりのコウタは、娘のアイの保育園のお迎えに来た。アイを抱っこして歩いているとクライアントから電話が。ちょうどこのエリアを通りかかり、一先ずアイを座らせる。すると、隣にいた女子高生達がアイの相手をしてくれたお陰で、電話をかけ直すことができた。急ぎの要件だったのでとても有難い。少しだけ彼女たちと他愛もない会話をしたのも息抜きになった。



友人との語らい

ケンイチ（ミュージシャン・29歳）
ハル（公務員・29歳）
リン（画家・25歳）

ケンイチは、久しぶりに学生時代の友人ハルとそのパートナーのリンと会うことに。気持ちの良い季節なので、おつまみとドリンクを駅前で購入してこのエリアで落ち合い、昔話やパートナーの故郷の話などで盛り上がった。「お店や家も良いけれど、ここは夜風やまちなかの空気を感じられるね」と二人とも心地良さそう。しばし、それぞれが楽しい夜に浸った。

ビジョンの実現に向けて

Bringing the Vision to Life.

未来ビジョンの策定は、ゴールではなく最初の一步です。
ビジョン実現に向けて、2つの取組を進めていきます。

取組 1

グラデーション・ポジティブ、ヒューマニティを大切にする

「空間・仕組み・つながり」づくり

官民が一体となった空間づくり、運営などの仕組みづくりを進めるためにも、関わる人が自然に関与できるつながりづくりを検討段階から組み込み、継続して行う

取組 2

誰もが興味を持ち、関わりたくなる

「ブランディング・マーケティングに基づく戦略的なエリアプロモーション」

ブランディング・マーケティングに基づき、取組の過程を積極的かつ戦略的に発信することで、仙台のイメージを一層向上し、絶えず期待感を持たせる

2025年



STEP 2, 3

引き続き協議会が沿道開発の動向を考慮しながら、沿道開発事業者とともにビジョン実現に向けた取組を進めます。また、エリアマネジメントを見据えたエリアの運営母体の育成を進めます。

STEP 4

運営母体が主体となり、沿道事業者、官民の関係者、プレイヤー、その他挑戦したいひととともに取組を進めます。

空間づくり・仕組みづくりで意識すること

近年の社会変化のスピードに的確に対応するためには、機敏で柔軟な姿勢が求められます。
そのため、空間づくり、仕組みづくりにおいては、状況や変化に応じて柔軟な検討を重ね、絶えず見直ししながら、段階的に取組を進めていきます。

つながりづくりで意識すること

人々が共通の関心や目的を持ち、支え合いながらつながることで、市民・企業・行政など価値観や所属がちがうステークホルダーとの交流と協力関係を築き、持続可能なエリアづくりの基盤となることを意識します。

エリアプロモーションで意識すること

一貫性のあるブランディングを軸に、ターゲットごとに適したプロモーションを展開します。
ストーリー性のある企画を交えながら、継続的な発信を通じて関心を高め、エリアへの期待感、持続的なつながりを生み出します。



エリアの未来を考える座談会

The Discussion on the Area' s Future.

未来ビジョンの策定に向けて議論を重ねてきた協議会委員と、2022年にこのエリアで実施した社会実験に参加した大学生が、エリアの未来について話す座談会を行いました。

未来ビジョンが生まれたプロセスを知ることによって理解を深め、エリアの未来と一緒に考えていただけたら幸いです。

〈座談会メンバー〉

奥村 誠（協議会座長、東北大学災害科学国際研究所教授）

岩間 友希、奥口 文結（協議会委員・将来ビジョン検討事務局）

梶田 響 クレア（東北大学文学部 3 年）

ビジョン検討の足掛かりは社会実験

奥村 都市空間は、地権者の意向だけではなく事業者の視点も重要で、双方がその地域の個性をちゃんと読み解いた戦略を立ててまちづくりをすることで発展し、地域の個性もより際立つんですね。ところが、駅前というのは放っておいても人が集まる場所だったので、特に戦略を立てなくても十分に儲かる時代がありました。

今、時代が大きく変化していくなかでこれまでの考え方が当てはまらなくなってきましたが、残念ながら今もそれを追い求めている人が多いように感じます。このエリアでも、皆どうすれば良いか悩んでいたというのが2021年時点の実態でした。

奥口 そんななか、未来ビジョン検討の足がかり

りとなったのが、2022年の社会実験です。岩間さんは準備事務局の一員だった当時を振り返っていかがですか？

岩間 初めは文化祭の準備のような感じで大変でしたが、期間の中盤になってくると楽しむ余裕が出てきましたね。普段のこのエリアとは違った層の方がいらして楽しんでいる姿がたくさん見られたのは印象的でした。

一方で、普段から利用している方にとっては少し刺激が強い空間だったとは思っています。現地にはいろんな声が届いて、価値観の違いの難しさを感じていました。

奥村 期間中は私も訪れましたよ。ここで過ごしていた人達は楽しそうにしていましたね。私自身は、ゆったり過ごしたいなら他のエリアの方がいいのではないかと考えていましたが、こ



の辺りでゆったり過ごせるところがないからこそ、ここでそのように過ごしたい人が多いことはよく分かりました。

奥口 社会実験の効果検証をしていくなかで、皆さんが何となく居心地の良いところを求めていることがわかった一方で、このエリアがあるべき姿についての議論を何度もしていきました。

はじめのキーワードは「まちあわせ場所」

奥口 はじめに考案したビジョンは「心が動く『まちあわせ場所』をつくり、これぞ『仙台の顔』と世界に誇れる表情を育てる」でした。これは、社会実験の効果検証で見えてきたニーズの一つである「仙台駅前に居心地の良さを感じられる機能や空間がほしい」などを踏まえています。

また、仙台駅前は、ステンドグラス前や伊達政宗像があった頃はその前など、シンボリックな待ち合わせ場所であることも踏まえると、このエリアを昔から知る方にとっても馴染めるキーワードなのではないかと考えました。

岩間さん、協議会委員としてその辺りはどう受け止めましたか？

岩間 「まちあわせ場所」というキーワードは、このエリアを回遊の起点にしたいという意味で掛け言葉にしているのが面白いと思っていました。でも、私は非公開イベントを運営しながら一般の方々の声を聞く立場でもあるので、一般的な待ち合わせ場所をイメージする人も多く、キーワードの意図を伝えきれないのではとは思いました。

実際にフィールドワークで青葉通を歩いた時に、「沿道のケヤキ並木が綺麗だな」とか、「高層ビルは都会感があるな」といったことに気付く場所で、スポットというよりは歩かせる場所なんだということは感じました。

奥口 まちあわせ場所というキーワードを改めて考え直すと共に、改めてこのエリアの特徴は何かという議論に戻ってきて、特徴を一つに括れないのが特徴なのではないかという結論に達しましたね。

商いをされている方もいれば、交通機関に携わっている方もいて、エリアに多様なひとが行き交っているという、良い意味でカオスな感じが魅力なのではないかと。

それで、このエリアの特徴を「多元的価値のあるエリア」としたんです。

多様性ではなく、グラデーションにした理由

奥口 今、さまざまなシーンで叫ばれる「多様性」については、このエリアでも考えるべきテーマでした。でも、キーワードには、多様性ではない表現を使いたいという思いがあり、採用したのが「グラデーション」です。

多様性は、色々な価値が点在し、それぞれがそれぞれで良いと一般的に捉えられていることが多いように思います。グラデーションは、お互いに重なる部分があって、影響を及ぼしあっている様子。これを前向きに捉えていこうという心構えを「グラデーション・ポジティブ」という言葉を使って表現しました。

奥村先生はこの言葉をどう捉えましたか？

奥村 私と他のひと、それぞれの周りの広がり重なって、誰もが孤立せずにその広がりの中にいるというイメージでしょうか。まちに多様なひとがいる以上、すべての人に100パーセント合わせることは不可能です。でも、誰もが80パーセント位の満足を感じるようにすることはできると思いますし、それに



よって新しいことへの出会いを生み出すと思うのです。

それぞれが自分にカスタマイズされたところに閉じこもってしまうと、新しいことが生まれません。周りには、私とはちょっと違うひとがいたり、私が知らなかったことが起こっていたりする、その状態こそがまちらしさだと思いますね。

奥口 これは、経済に関してもいえることではないでしょうか。商売は、事業者が100パーセント、もしくはそれ以上を目指して利益を上げていく世界ですが、このエリアで営むには他との共存も必要です。

一方で、協力し合うことで相乗効果でさらに利益を上げられるかもしれませんし、そういうことが盛んに行われることでエリア価値が上がるのではないかという期待も込めているんです。



岩間 私がグラデーション・ポジティブという言葉が好きな理由は、AIにはできないことをしようっていうことだから。個人に最適なものを作るのはAIの得意技ですが、そればかりやっていると、どんどん偏って新しいことが生まれない。

化学反応が起こせるのは、AIより不器用な「ひと」だからこそだし、ペDESTリアンデッキの上だけで一日4万人以上が行き交うこのエリアでは、思ってもみないことが起きることを大切にしていって良いんじゃないかと思っています。

グラデーション・ポジティブって「あなたはマジョリティ、私はマイノリティ」みたいな分け方をしていないから、皆どこかしら異質なものを持っているなかで、それが合体すると面白いということを表現できているなと思います。



「ヒューマニティ」って何？

奥口 エリアづくりにおいて、具体的に何を軸に据えるのかについてもたくさん議論しました。何十年先も普遍的でなければならない一方で、場合に応じて変わっていくことを良しとするものにもしたい。

そこで、色々なまちづくりで謳われている「人中心」からさらに一步踏み込んで、ひとの感情や、ひとと関わり合うことによってゆたかな

気持ちになることを大切にすること、それは「ヒューマニティ」なのではないかと考えたのです。

奥村 バスを待つ、買い物をして帰るといった簡潔な目的だと多様な表情は生まれにくいですが、個人でゆっくり過ごしたいひとや、誰かと交流してみたいひとにとっても選択肢があるエリアを作っていくことが、ヒューマニティに繋がっていくのではないかと思いますね。

特に、観光で訪れたひとにとっては、仙台に降り立つ時よりも離れる時に「こういう良いことがあったな」と思い出してもらえるような場所こそが必要。

そこに色々なストーリーができて、そのストーリーがちゃんと他のひとに伝わり残していけるような場所が欲しいなと思います。

仙台の第一印象は「社会実験」

奥口 ここからは、梶田さんにも加わっていたできます。梶田さんは、冒頭で話をした社会実験に来てくださっていたそうですね。

梶田 はい。ちょうどその日は友人と食事をした後、仙台駅周辺をぶらぶら歩いていたんです。すると、普段は見かけない椅子が並べられ、地面には芝生が敷かれているエリアを見つけました。気になって近づいてみると、焚き火が行われていて、さまざまな年代の方々が集まっていたんです。

皆さん楽しそうで暖かそうだなと思い、友人と一緒に輪の中に入りました。明るいうちに訪れたのに、気づけば暗くなるまで2〜3時間はそこに居ました。

奥口 当時は大学一年生だったんですね。

梶田 はい、東京から大学進学で仙台に来まし



た。引っ越してきてまだ数カ月で、私にとって仙台の第一印象は社会実験なんです。仙台ってこんなにオープンなまちなんだと、すごくびっくりしたのを覚えています。

奥口 焚き火に参加するのにハードルはありませんでしたか？

梶田 参加のハードルが高いと感じることはありませんでした。むしろ、日常に溶け込んだ空間で、気軽にふらっと立ち寄れる雰囲気があり、出入りが自由で拘束されないのが心地良かったです。

ちょうど近くに座っていた社会人の方が今のインターン先のenspace社員で、話しかけてくださったのをきっかけに、学生インターンを募集していることを知りました。私はもともとインターンを探していたので、後日会社にお邪魔し、今もインターンを続けています。

岩間 県外から来た方のフットワークって、想像以上に軽いです。右も左も分からない

まちだからこそ、新しい出会いが欲しいひとや、あわよくばお仕事になったらいいなと思っているひとは相当数いると思います。特に学生さんは、ネットやSNSを見慣れすぎて、そこでは出会えないものと出会いたいっていう気持ちは結構強いように感じますね。

誰にとっても入りやすく、出やすいエリア

梶田 先程の「ヒューマニティ」の話を聞きながら、自分にとって住みやすく、心地良いまちはどんなまちだろうと想像していました。そして、ずっと住み続けたいと思えるかどうかは、やはり「ひと」が大きな要素なのかなと感じました。

私は幼少期をシンガポール、高校時代を東京で過ごしましたが、それらの時期と比べても、仙台では多様なひとと関わる機会が多いです。大学の友達や教授に限らず、バイトやインターン先のお客さんや社員さんとも日々コミュニケーションを取るなかで関係が築かれ、それが私にとって心地良さにつながっています。

写真左から

奥口文結 / 梶田 響 クレア / 奥村誠 / 岩間友希



そんなふうに、仙台が他の人にとっても心地良いまちであつたらいいと思う一方で、このエリアで社会実験が行われたり、多くの方が活動に取り組んでいたりを、意外と知らない友人も多いと感じました。

もっと活動が認知されて広がると嬉しいので、例えば、社会実験の焚き火のように、活動の場を日常に浸透させる工夫をして、参加のハードルを下げることも効果的なのかなと思います。

岩間 エリアづくりには関わる色々なレベルがあると思っています。何も、勉強会ががつつり学ぶようなことまでなくて良い。特にこのエリアでは、ただ知らない人と出会って話すだけでも良いと思うんです。「私もこの通りに勤めているんですよ」みたいな話をして、相手の顔や表情が分かるだけで話が盛り上がると思うので、色々なつながりやレイヤーを作れたらいいなと思います。

奥村 逆説的ですが、ちゃんと逃げられて、気分が乗らない時は参加しなくても許されるけれど、できることがちゃんとあるような場所が大事な気がします。活動にのめり込むひとは、周りとの温度差が縮まらないままになってしまうこともあります。

「これに参加してください」ではなくて、「良いと思ったら参加してね」とか「良いと思わなくてもいいし、帰りたくなったら勝手に帰っても大丈夫だよ」っていうようにしないと、開いた場所にならないと思います。

未来ビジョンを通して描くそれぞれの未来

奥口 最終的に、このエリアで目指していきたいビジョンとして策定したのは「センター・オブ・ヒューマニティ」です。

これは、エリア全体のビジョンとして考案した造語で、自由に解釈を広げられる言葉として設

定しています。これを一つのテーマとして市民の皆さんにも受け取っていただき、グラデーションを良しとして、ヒューマニティを大切にしながらそれぞれがエリアの理想を描いてくれたら良いなという気持ちがあります。

現状はここからのスタートです。

岩間 長らく協議会委員としてこのエリアに関わり、本当に議論をし尽くして今出せる最適解が出ていると思うので、この冊子を読んでもくださる皆さんにもジレンマとチャレンジが伝わると嬉しいです（笑）。

皆、本質的な意味で流行っているまちが人を惹きつける理由を考え続けてほしいと思うんです。このエリアは人を惹きつけるポテンシャルがあると思っているので、それが結果として機能に活きてきたらいいなと思いますね。

梶田 私の周りでは、就職で関東や関西へ行くひとが多いのが現状です。仙台に住んでいなくても、仙台が将来の転職先の候補や旅行の行き先になるように、皆の心に残る場所になったらいいなと思っています。

この未来ビジョンが今後のこのエリアと仙台に対してどう影響していくのか、すごく楽しみにしています。

奥村 仙台と関東の他県を比較すると、職種の多様さや通勤時間の短さから、はるかに都会的といえます。さらに、事業者目線では、このエリアの徒歩圏内に地価が安いエリアも多いので、事業にも挑戦しやすいはずですよ。

まちの本質は新しいことに出会えることだし、新しいことを創ることにチャレンジできることだと思うので、エリアビジョンによって、エリアが発展し、本当の意味で都会になってほしいと思います。

資料編

Data and References

資料編では、未来ビジョン策定までの協議会のあゆみを時系列で振り返ります。

青葉通駅前エリアのあり方検討協議会ではどのような議論が交わされたのか、市民からはどのような意見が寄せられたのか、未来ビジョンの策定に向けて実施した社会実験 MOVE MOVEによってどのような知見が得られたのかをまとめています。

協議会のあゆみを通して、未来ビジョンについての理解を、より深めていただけたら幸いです。

協議会のあゆみ

The Road to Establishing the Council.

未来ビジョン策定までの協議会のあゆみを、
2021から2022年と2023から2025年の2つの期間に分けて紹介します。

平成24年 2012年	青葉通まちづくり協議会が発足 青葉通周辺の商店会、町内会、企業などの地元関係者で構成される協議会
平成30年 2018年	青葉通まちづくり協議会から青葉通の一部広場化を含んだ「青葉通まちづくりビジョン」を仙台市長に提言
令和元年 2019年	新たなまちづくりの動きが生まれる 「せんだい都心再構築プロジェクト」の始動
令和2年 2020年	青葉通仙台駅前エリアで民間事業者による沿道開発の機運が高まる
	民間における青葉通仙台駅前エリアのまちづくりの機運が醸成され 仙台市における新たなまちづくりが始動
令和3年 2021年	青葉通駅前エリアのあり方検討協議会を設立 ・学識経験者、商工関係者、沿道地権者、交通事業者、交通管理者、仙台市で構成している協議会
	青葉通仙台駅前エリアの将来ビジョン作成に向けた検討・取組をスタート

令和3年 2021年	・エリアの現状や特性を整理 ・エリアづくりに向けた3つの視点を作成 ・社会実験に向けた議論がはじまる
令和4年 2022年	市民参画イベント「MACHITO SENDAI」を開催 ・社会実験の利活用内容や将来ビジョン作成に市民からの意見を反映させるために開催 青葉通仙台駅前エリア社会実験「MOVE MOVE」を実施 ・道路空間の利活用の効果、交通への影響及び都心における回遊の創出検証のために実施
令和5年 2023年	社会実験の効果検証の深掘りを実施 ・年代や属性ごとに求められる機能、空間、要素について分析 青葉通沿道のオフィスワーカー等との意見交換会をスタート ・青葉通に関わるひととの意見交換とつながりづくり 社会実験の振り返りイベント「MOVE MOVEとは何だったのか？」を開催 ・社会実験の目的や検証結果を広く市民に伝え、市民の意見を収集
令和6年 2024年	社会実験のアーカイブ冊子「MOVEMOVE ARCHIVE BOOK」を作成 ・社会実験の企画、準備、実施の過程と効果検証の深掘り結果のアーカイブとして作成 トークイベント「居心地の良いまちってなんだろう？」を開催 ・社会実験の効果検証で出た「居心地の良さ」について市民と一緒に考え、市民の意見を収集 未来ビジョン骨子案を作成 ・エリアへの想い、3つの目指すこと、実現に向けて共有した価値観について協議会で共有 未来ビジョン中間案を作成 ・将来像、取組の方針に対する価値観と方向性について協議会で共有
令和7年 2025年	未来ビジョン最終案を作成 ・ビジョン、このエリアで大切にすることについて協議会で共有
	青葉通仙台駅前エリアの未来ビジョンを策定

エリアの現状や特性を整理

2021

現状1 若い世代の減少が危惧される

現在の仙台駅周辺は、県内及び東北各県の若い世代が多く集まるエリアです。しかし、宮城県を除く東北各県の年少人口増減率は全国ワースト5（宮城県は18位）。今後は来訪者の減少が危惧されます。

10年間の年少人口減少率（2012年-2021年）

順位	県名	年少人口減少率	年少人口減少数
1	東京都	6.4%	+95,673 人
2	沖縄県	-1.4%	-3,546 人
3	福岡県	-2.2%	-15,397 人
...	...	...	...
18	宮城県	-10.4%	-31,658 人
...	...	...	...
43	山形県	-17.8%	-26,216 人
44	福島県	-18.1%	-47,297 人
45	岩手県	-18.7%	-30,854 人
46	青森県	-21.5%	-36,453 人
47	秋田県	-22.5%	-27,283 人

【出典】
住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数（総務省）より作成

現状2 「仙台の顔」としての表情が見えない

写真は、上と左下が平日の午後1時頃、左下が夜7時頃の様子です。どんな人がどのように利用しているのかが見え、「表情が見えない」エリアといえます。

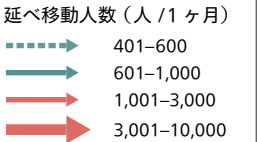


現状3 ペDESTロリアンデッキと東西自由通路に回遊が集中

図によると、仙台駅東口・PARCO本館・仙台ロフトを結ぶ大きな三角形ができています。これが、現状の仙台駅前の人の流れで、東西自由通路とペDESTロリアンデッキでの回遊がメインとなっています。



分析期間：2019年10月 分析データ：「ジョルテ」ログデータ
分析方法：上記分析対象の移動行動に対して、各代表地点間での延べ移動人数を集計
分析対象人数：10,287 人 / 1 ヶ月
* 移動人数が1日あたり13人（401人 / 1 ヶ月）以上の経路のみを表示
* 仙台駅方面から仙台中心部への流動のみを表示
* 代表地点間を移動していても、仙台駅・仙台駅東口・仙台駅西口のいずれも訪れていない人は分析対象外



エリアづくりに向けた3つの視点	2021
協議会委員からの意見を踏まえ、 エリアづくりに向けた3つの視点をまとめました。	
視点1 仙台の顔としてのエリア 視点から目指したいこと： 1 このエリアや仙台の個性・強みをいかしながら、様々な人がこのエリアにいきたく なり、訪れる人に仙台の第一印象として好印象を与え、市民が誇れるエリアに すること。 2 エントランスの役割として、他エリア（東北・仙台市内・都心各エリア）へ導くこと。	
視点2 多様な活動があふれる人中心のエリア 視点から目指したいこと： 1 楽しさ、ワクワク感、居心地の良さ、暖かさ、安心感、魅力的・刺激的な経験といっ た、訪れる人の感情や活動を生み出し、様々な人が惹きつけられるエリアとすること。 2 人との交流や出会によって、イノベーションが生まれるエリアとすること。	
視点3 エリア価値向上のために挑戦するエリア 視点から目指したいこと： 新たな魅力を生み出すことや、社会の変化に応じて変えていくことなど、このエリア に関わる多様な主体がエリア価値向上のためにビジョンを共有し、挑戦すること。	

2021	エリアに求められる機能
視点1 仙台の顔としてのエリア ・仙台の個性や強みをいかした機能・空間（豊かな緑、防災環境都市、学都、文化など） ・「おもてなし」の機能・空間 ・仙台駅を出た人が認識しやすい機能・空間（特徴的な目印、サイン、アプローチなど） ・仙台・東北を気軽に体感できる機能 ・他のエリア（東北、仙台市内、都心各エリア）に導く機能 （他のエリアを案内する機能、他エリアとの連携など） ・風が強い日、寒い日を生かした機能・空間	
視点2 多様な活動があふれる人中心のエリア ・周辺のオフィスワーカー、親子、若者など、様々な人が楽しめる機能・空間 ・居心地の良さを感じる機能・空間 ・来訪者や周辺のオフィスワーカーなどが安心できる機能・空間 ・アクセスしやすく、移動したくなる機能 ・音、色、匂いなど五感を刺激する機能や空間 ・人との交流や出会いを促す機能や空間	
視点3 エリア価値向上のために挑戦するエリア ・フレキシブルに運用できる機能・空間（必要に応じて歩道空間を広げるなど） ・将来ビジョンを踏まえつつ、社会のニーズや変化に柔軟に対応する機能・空間 ・隣接建物との相乗効果を発揮する機能・空間（隣接する建物との一体性や連携） ・新たなコトを起こし、新たな価値を生み出し続けることを意識して機能・空間を考える・新たなテ クノロジーの積極的な活用を意識して機能・空間を考える ・このエリアの持続可能な運営を意識して機能・空間を考える（人材発掘・育成、収益事業と維持管 理など）	

MACHITO SENDAIとは？

このエリアは、様々な人が行き交い多様なニーズがあるため、未来ビジョンの策定には、協議会委員だけではなく、市民の意見を聞きながら検討することが求められました。さらに、今後のエリアづくりには、このエリアに関心を持って共に取り組む「ひと」を探すことも必要でした。そこで、このエリアを訪れることが多い若い世代を主な対象とし、さまざまな分野で活動する方々の登壇＆ワークショップイベントを3回開催しました。

外から中が見える開放的な飲食店を会場とし、参加者が自由に出入りできるようにすると共に、登壇者が話をするだけではなく、参加者からも意見交換を行い、共にこのエリアの未来について考える機会としました。



第1回「MACHITO SENDAI vol.1」

開催：2022年3月27日

場所：CROSS B PLUS

登壇者：このエリアの取り組みに関心を持ち、様々な分野で活動する方々

参加者層：10～60代の幅広い世代が参加（うち10～30代が6割）

第1回は、このエリアに関心を持ち、共に取り組む「ひと」を見つけるため、仙台の様々な分野で活動する方々を迎えてトーク＆ワークショップを実施しました。参加者には、まちづくりに従事する方の仕事やアイデア事例、暮らしを豊かにするフラワーアレンジメントのワークショップなどを通して、このエリアと周辺エリア、ひいては仙台のまちに興味を持ってもらうことを目的としました。

参加者から寄せられたアイデア

青葉通で楽しみたいこと、やりたいことのアイデアを自由に出し合い、イラストにまとめました。そのなかで挙がった寛げる空間の創出や焚き火は、社会実験 MOVE MOVE で実施しました。



第2回 「MACHITO SENDAI vol.2」

開催：2022年5月32日

場所：CROSS B PLUS

登壇者：このエリアの取り組みに関心を持ち、様々な分野で活動する方々

参加者層：10-60代の幅広い世代が参加（うち10-30代が6割）

第2回は、第1回に引き続き、このエリアに関心を持ち、共に取り組む「ひと」を見つけるため、仙台の様々な分野で活動する方々を迎えてトーク&ワークショップを実施しました。

参加者には、このエリアと周辺エリアで商業やイベントを行う方の話を聞いてもらったり、まちに対して感じていること、求めていることを自由に出してもらうことで、自分もまちに参画できるという気付きを得てもらうことを目的としました。

参加者から寄せられた声

「青葉通の印象」「10年後に望む青葉通の姿」などについて自由に意見を出し合い、参加者がイラストにまとめました。

Q. 今の青葉通りの印象は？

駅を降りてすぐに目に入る空間

通行目的の道

東二番丁通との交差点は
地下道になっていて渡るのが面倒

Q. 10年後に望む青葉通の姿は？

どんな人が歩いていたり
活躍していたりしても
「あ、そうなんや」で受け止められる
寛容なエリア

ファッションも、恋愛のあり方も、自由で。
頭ごなしに否定したり、
揶揄ったりしない雰囲気のエリア



第3回 「MACHITO SENDAI vol.3」

開催：2022年8月27日

場所：EDEN bar allegro

登壇者：このエリアの取り組みに関心を持ち、様々な分野で活動する方々

参加者層：10-60代の幅広い世代が参加（うち10-30代が6割）

第3回は、社会実験 MOVE MOVEに先駆け、実験コンテンツに関わる方々を迎えてトーク&ワークショップを実施しました。

天然アロマを使用した「仙台をイメージする香りづくり」のワークショップや、人が集う空間づくりや音響など、参加者に実際に五感を使って体験してもらうことで、社会実験やまちづくりへの関心を高めてもらうことを目的としました。

登壇者から寄せられた声

社会実験や今後のまちづくりに向けて、様々な考えが寄せられました。

嗅覚情報は直接脳に伝わり、
感情を動かすことがあるので
香りを通してまちのことを考える方法もある。

学生の視点を取り入れ、仙台のまちなかで
自己表現を通じて自分を好きになれる機会を
提供し、自己実現の場をつくりたい。

人が集う空間づくりを通して、
訪れる人の「心のゆたかさ」を向上させることができれば、
より街が活性化し、経済面にも好影響を与えるのではないかな。

まちなかで気軽に演奏や発表ができる場をつくる
ことは、まちの魅力向上につながるのではないかな。
音楽を流すことで滞在時間が延びた事例もある。

焚き火を通して学生、社会人などたくさんの出会い
があるといい。会話がなくとも、その場にいるだけ
でつながりを感じられることが必要ではないかな。

未来ビジョン策定に向けた社会実験を 18 日間実施

実施期間：2022年9月23日～10月10日

エリアづくりに向けた3つの視点（p50）を踏まえ、このエリアが回遊の起点となり、多様な活動が生まれる人中心の空間となること、「仙台の顔」としての表情を生み出し、新たな賑わいを創出することを目的に実施しました。

期間中は一般車の通行を規制し、バス・タクシーのみ通行可能とする交通規制を実施。EDEN側の片側4車線のうち3車線を規制し、利活用空間と自転車通行空間を設けました。実験では、道路空間の利活用の効果や、まちなかへの回遊の起点となるか、交通への影響を検証しました。

空間の利活用コンセプトは「青葉通仙台駅前エリアのひととなりを見出し、新しい流れを生む」。通常「ひととなり」という言葉はまちに対してはつかいませんが、まちは、ひとが活動し交流することで初めて活きた場所になるのではと考え、意図してこの言葉を使いました。

また、現状の表情が見えないエリアにさまざまなひとが集い交流することで、新しい流れを生み出すことを目指しました。

- ① 仙台の顔としてのエリア
- ② 多様な活動があふれる人中心のエリア
- ③ エリア価値向上のために挑戦するエリア



3つの視点を踏まえて「エリアの将来ビジョン」をつくるために公共空間での社会実験を実施。

検証したいこと

1. 道路空間の利活用の効果
2. 街中への回遊の起点となるか
3. 交通への影響



3つの視点を踏まえた
コンセプト・ターゲットを設定。

空間デザイン、ビジュアルデザイン、コンテンツ
効果検証内容・方法を検討



2022年（令和4年）青葉通仙台駅前エリア
社会実験「MOVE MOVE」を実施。



「良い取組」との意見が全体の7割

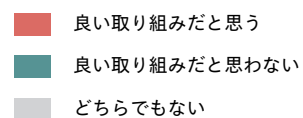
30代までの若い世代、市外居住者では8-9割

実験に対する評価をアンケート調査しました。回答した人の5割以上は仙台駅前に多く来訪している若い世代（10代-30代）。

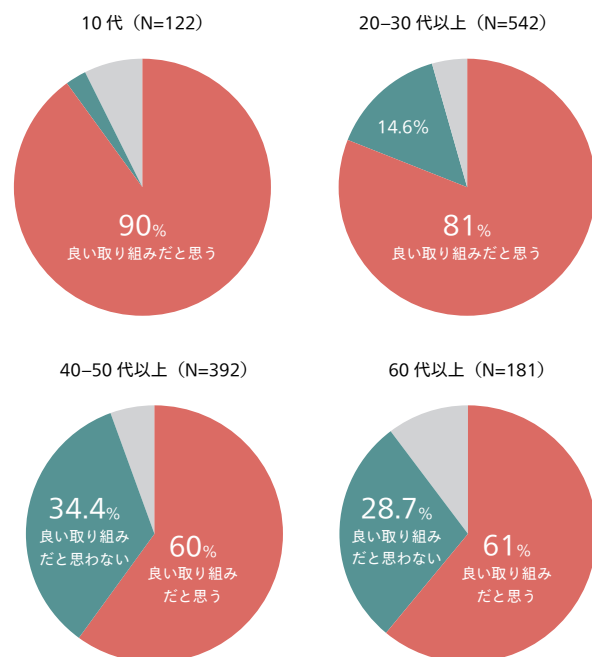
その8割以上が「良い取り組みだと思う」と回答しました。

年齢が上がるにつれその割合が下がり、40代以上は6割となっています。

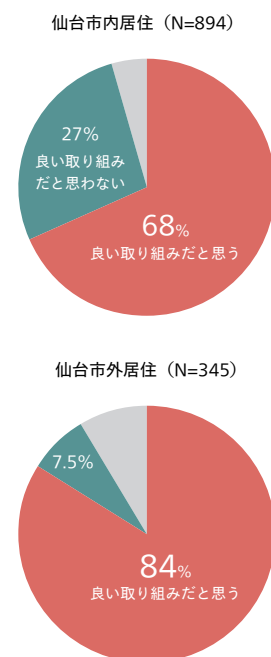
また、市内の人は約6割、市外の人は約8割が評価しています。



年代ごとの社会実験への印象



居住地ごとの社会実験への印象



社会実験の交通規制に伴う迂回の影響で

広瀬通と仙台駅周辺で混雑が発生

交通規制による影響を調査しました。

仙台駅付近と広瀬通での交通混雑（影響①）や規制区域への誤侵入（影響②）、バス停の移設による誤乗車（影響③）、バス停の集約によるバス待ちのスペース不足（影響④）などの影響が発生しました。

また、自家用車で仙台駅一般車降車場に訪れた人の約6割、市内中心部に訪れた人の約4割が「影響があった」と回答、「バス停の移設場所が分かりにくい」といった声も寄せられました。



協議会のあゆみ 2023–2025

The Council's Journey (2023–2025).

未来ビジョン策定のため、社会実験の企画・運営を担った民間メンバーによる「将来ビジョン検討事務局」を設立しました。社会実験の効果検証データの深掘りによって得た知見、市民から寄せられた意見、協議会委員の考えをもとに未来ビジョン案を作成し、協議会で策定しました。

社会実験の振り返りイベント「MOVE MOVE とは何だったのか？」

2023

開催：2023年10月15日

場所：CROSS B PLUS

参加者層：10–60代の幅広い世代が参加

登壇者：社会実験の企画・運営に携わった各担当者、このエリアの取り組みに関心を持ち、様々な分野で活動する方々、現在は東京に居住し、仙台居住経験がある方

社会実験 MOVE MOVEの企画・運営に携わった各担当が、さまざまな立場の聞き手からの質問や参加者からのコメントを交えながらクロストークを実施。

改めて「MOVE MOVE とは何だったのか？」を振り返りながら知見を深め、このエリアの未来ビジョン策定に向けて、市民の意見を取り入れることを目的としました。

参加者の声

定禅寺通と比べて「発信」がしにくい通り。
仙台駅の目の前にあるにもかかわらず、なにも特徴が無い通り。
良くも悪くも「何もない」ので、市役所・市民・民間業者が一体となって考えていければよいですね。

社会実験のような空間があると「仙台の顔」と言えるのかもしれないけど、現状はなかなか「仙台の顔」とは言えないかな。

仙台が段々リトル東京化してきて悲しいところだったので、今回のイベントは何か街の活力のようなものが感じられて嬉しかった＆元気ができました。

効率・デジタルばかりに目が行きがちな社会ですが、今回のMOVE MOVEのような場があることで、「人」の繋がりが促されたらいいと思う。

市民が自分ごととしてまちづくりに参画できる仕組みづくりはすごく良いと思った。あとは都市圏に若者が流れてしまうのをどうにか食い止め、まちで活躍する若手が増えていけばいいなと感じた。



将来ビジョン検討事務局では、社会実験 MOVE MOVE 後の2023年から、実験に参加されたひと、青葉通に関心があるひとを中心に、実験結果を共有し意見を言い合える「つながりづくり」に役立てる取組を進めています。取組を通して顔が見える関係を築き、まちの未来を主体的に考え行動するコミュニティを育てることを目的としています。

つながりづくりの仕掛け

コミュニティは、長期的な目線で段階を踏み、醸成していくことが重要です。

	2023 年	2024 年	2025 年
事務局主導	種まき 匿名で参加できる10人未満の会を主催する	芽ぶき 匿名で参加でき、顔見知り同士が交流できる10-20人規模の会を主催する	水やり 匿名でも参加できるが、希望に応じ名前を公表しても良い20-30人規模の会を主催する
市民による企画	芽つぎ 市民から自発的に生まれた取組をリーディング・プロジェクトとして応援し、さらに新しい取組が生まれていくよう促す		

ねらいと大切にしている視点

目的とビジョンの共有

コミュニティが目指す方向性を明確にし、参加者の共感を生む。「なぜこのコミュニティが必要なのか？」を噛み砕いた言葉で伝え、共有する。

コアメンバーの結成

志を共有でき、コミュニティに関する活動ができるひと数名に呼びかける。役割を分担しながら、小規模な活動を開始する。

参加者の巻き込みと関係性の深化

イベントやワークショップ、新たな参加者を増やす。多様な価値観を受け入れながら、ゆるやかにつながる場をつくる。

快適に交流できる環境の整備

コミュニティ内で自主的なプロジェクトが生まれる環境を整える。参加者が主体的に動く仕組み（オンラインプラットフォームや情報共有ツールなど）を導入する。

取組事例1）青葉通ざっくばらんトーク

コミュニティ醸成の取り組みの一つとして実施している、カジュアルな空間で肩書や本名を明かさずに参加できる非公開のイベントです。オフィスワーカー、学生、地権者など、多様な属性の人々が参加しているため、このエリアに関わるはじめての一步としておすすめです。今後は、未来ビジョンを踏まえた未来志向のテーマで展開していきます。



「ざっくばらん mtg」のグラフィックレコード

肩書を気にせずに、青葉通のことを個人の目線で話せた

こんな価値観の人もあるんだと気付けた

チャレンジ好きな仲間が見つかった

青葉通で新しいチャレンジをしたくなった

将来的にこんな声が生まれるよう進めていきます

取組事例2）リーディングプロジェクト

将来ビジョン検討事務局が進める「つながりづくり」だけではなく、市民から自主的に生まれ、他の見本となり、牽引していきそうな取組を「リーディング・プロジェクト」と呼んでいます。

Aoba Avenue Asobu Collective (AAAC / 青葉通で遊ぼう) 2025～

このエリアで共同体をつくりながら「まちの姿がどんなに変わっても、青葉通近辺にいたら、なんか楽しい！」という状態を目指し、活動していく取組。



社会実験当時の様子や深掘りの結果などをまとめたアーカイブ
冊子「MOVE MOVE ARCHIVE BOOK」を作成

発行日：2024年4月10日

入手先：冊子は仙台市内各所に配布、PDF版は青葉通関連の情報発信サイト

「AOBA DORI MOVE」から閲覧することができます。

<https://aoba-dori-move.com/2024/06/03/post-271/>

社会実験の企画・実施・検証の過程を
整理し、誰もがその内容を知ることが
できるよう、アーカイブブックとして
まとめました。

将来ビジョン検討事務局のメンバーが
集まり、社会実験の効果検証結果やイ
ベントなどで寄せられた意見を踏まえ、
社会実験中の様子を振り返りながら意
見交換をし、深掘りの結果見えたこと
を掲載しています。



写真上)
社会実験についてとりまとめたアーカイブブ
ックの表紙

写真下)
将来ビジョン検討事務局メンバーによる意見
交換の様子

項目ごとのふり返し

コンセプト

コンセプト「青葉通仙台駅前エリアのひととなりを見出し、新しい流れを生む」について、
これを踏まえた利活用空間とコンテンツの実施により、エリアに通常よりも多様な属性のひ
とが多く訪れ、視点②「多様な活動があふれる人中心のエリア」の可能性が見出せた
→ 視点①「仙台の顔としてのエリア」に、多様な活動・滞在・交流という「表情」が浮かび
上がった

ターゲット

想定ターゲット「働くひと・学ぶひと・働きたいひと・学びたいひと」について、具体的に
は、20-30代の学生や社会人が多く訪れた。
平日午後は学生、平日夜は仕事帰りの社会人、休日日中は、通常このエリアで割合が少なかつ
た幼児や小学生の子どもを連れた子育て世代の社会人が多く訪れた。
→ 曜日や時間帯で訪れる属性とニーズが異なるため、ターゲット設定とそれに基づく空間
づくりが必要

ビジュアルデザイン
空間デザイン

・赤と青のキーカラーは、MOVE MOVEのコンセプトに基づいて採用した
→ エリアに新しい印象を生むことができた、恒常的な空間に最適な配色は別の視点でも検
討が必要

・空間の設えを訪れた人が自由に使っていたのが良かった
例) 人工芝を敷いた場所→赤ちゃんがハイハイする、学生が座って休憩するステージの段差、
ジグザグの仕切り→子ども達が遊具として使う、大人がベンチとして使う
→ 使い方の自由度を高める、ユニバーサルデザインへの配慮も必要

コンテンツ

コンセプトと想定ターゲットを踏まえた多様なコンテンツを多数実施したことで、これまで
見られなかった多様な活動・滞在・交流（具体的には体験や遊び、くつろぐ、会話など）が
見られた。
→ ターゲット設定とそれに基づくコンテンツを実施することで、目的を持って訪れるひと
が増え、にぎわい創出やまちなかへの回遊の可能性につながると考えられる

1 MOVE MOVEに訪れた〈子ども・学生・社会人・主婦/主夫〉が、 このエリアに対し、それぞれの〈居心地の良さにぎわい〉を求めている

2 「居心地の良さにぎわい」には 「静的な居心地」と「動的な居心地」がある

静的な居心地とは？

- ・受動的、安らぎ、間接交流、合流、くつろげる、休憩
- ・イベント・アクティビティに参加しないが、同じ空間にいることは楽しんでいる
- ・拍手や笑いで参加しているなど、緩やかに繋がっている満足感
- ・人の目が届いている安心感がある 例) 警備員がいて管理されている
- ・個々の楽しさ（携帯を見ながら居心地良く過ごしているなど）
- ・多様な属性の人が同じ空間にいる

動的な居心地とは？

- ・積極的、直接交流、人を動かす仕掛け、驚き、アクティブな楽しさ、雰囲気がある
- ・会話をする、何かを一緒にするなど、人と人との直接的なコミュニケーション量が多い

ハード面の居心地の良さとは？

- ・目が届く広さである
- ・衛生面がクリアされている 例) 石、動物のふんなどが無い
- ・空間の設えに安心感がある 例) ベンチ（心理的にちょうど良い距離感で設置）、目隠し（個々のテリトリーに踏み込みすぎない）
- ・公共交通機関、商業施設に隣接している

居心地の悪さとは？

- ・空間に人が密集している時
 - ・空間に余裕はあるが、心理的に居心地が悪い時
- 例) 親子連れが集中している時に、社会人一人など、自分とは異なる属性の人が集中している時
- ・声をかけられたくない時、人と関わりたくない時
 - ・イベント・アクティビティを実施すると来訪者が増え、人口密度も増え、静的な居心地が損なわれる
- イベント・アクティビティを実施する時間帯、場所などへの配慮が必要

3 将来ビジョンづくりへ向けて

今回の意見交換会で見た「居心地の良さにぎわい」をエリア価値に必要な要素として、将来ビジョンの検討に取り入れていきたいと考えています。



協議会の開催状況		2025
2021年から2023年にかけて開催した延べ7回の協議会では、 エリアの現状や特性、社会実験の成果・深掘りなどを踏まえた議論を行いました。 そして、2024年から2025年にかけて開催した延べ3回の協議会で、 未来ビジョンのとりまとめ、策定に向けた協議を行いました。		
第1回 協議会 2021年3年6月1日	・協議会の設立に関すること ・協議会の進め方及び検討事項	第7回 ワーキンググループ 2022年7月5日 ・社会実験の計画（利活用、交通規制）
第1回 ワーキンググループ 2021年7月9日	・ワーキンググループに関すること ・他都市事例紹介（国土交通省 東北地方整備局より）	第3回 協議会 2022年7月15日 ・ワーキンググループの協議経過報告 ・社会実験の計画（日程、利活用、交通規制） ・市民参画イベントの開催報告
第2回ワーキンググループ 2021年8月6日	・あり方検討の進め方 ・エリアの現状確認、整理	第4回 協議会 2022年8月25日 ・社会実験の計画 （交通規制、空間デザイン、コンテンツ、広報、効果検証） ・市民参画イベントの開催報告
第3回 ワーキンググループ 2021年11月1日	・データから考えるエリアの将来の姿 ・大丸有エリアの紹介（三菱地所株式会社より） ・エリア周辺の交通状況の整理	2022年9月23日～10月10日 青葉通仙台駅前エリア社会実験「MOVE MOVE」
第4回 ワーキンググループ 2021年12月1日	・エリアづくりの視点検討 ・社会実験に向けた交通処理の検討	第8回 ワーキンググループ 2022年12月26日 ・社会実験の効果検証結果の速報（アンケート結果、交通量調査）
第5回 ワーキンググループ 2021年12月22日	・エリアづくりの視点、求められる機能・空間の検討 ・社会実験に向けた交通処理の検討	第5回 協議会 2023年3月28日 ・社会実験の効果検証結果（アンケート結果、交通量調査）
第2回 協議会 2022年1月26日	・ワーキンググループの協議経過報告 ・社会実験の計画（目的、交通規制）	第6回 協議会 2023年8月4日 ・社会実験の効果検証結果の振り返り ・将来ビジョン策定までの進め方
第6回 ワーキンググループ 2022年5月9日	・社会実験の計画（日程、利活用、交通規制） ・市民参画イベントの開催報告	第7回 協議会 2023年12月22日 ・社会実験の効果検証結果の深掘り状況 ・コミュニティ醸成の取組状況報告（人材の発掘、コミュニティ育成） ・情報発信
		第8回 協議会 2024年9月3日 ・将来ビジョン骨子案 ・コミュニティ醸成の取組状況報告（人材の発掘、コミュニティ育成） ・情報発信
		第9回 協議会 2024年12月23日 ・未来ビジョン中間案 ・コミュニティ醸成の取組状況報告（人材の発掘、コミュニティ育成）
		第10回 協議会 2025年3月25日 ・未来ビジョン最終案 ・コミュニティ醸成の取組状況報告（人材の発掘、コミュニティ育成）

令和6年（2024年）8月 骨子案を提示

【将来ビジョン検討事務局から提案した内容】

ビジョン：

心が動く「まちあわせ場所」をつくり、これぞ「仙台の顔」と世界に誇れる表情を育てる

ビジョン実現に向けて共有したい価値観：

グラデーション・ポジティブ



【委員意見】

●まちあわせ場所について

- ・このエリアに留まるといった限定的な用途イメージ
- ・複数名での出会いの場を連想する。一人で歩いているひと、活動しているひとがいるため、他人事になってしまわないか
- ・回遊を含めた動的な広がりを感じられない

●全体について

- ・このエリアの最大の役割は経済の中心
- ・グラデーションとすることでつながりの中で色々なものを認めていく、色々な事が活かされる場にしていきましょうと捉えられ良い表現
- ・価値観だけでは今後の方針が見えにくい
- ・人、建物、空間、雰囲気などから生まれる形に表せられない感覚を表情として自信を持って言えるようになるべき
- ・ビジョンの表現は、埋没しないように尖ったテイストで進めていきましょう



令和6年（2024年）12月 中間案の提示へ

令和6年（2024年）12月 中間案を提示

【将来ビジョン検討事務局から提案した内容】

ビジョン：

多元的価値をいかしあい あらゆるゆたかさと仙台への愛着の起点となるエリアをつくる

ビジョン実現に向けて共有したい心構え：

グラデーション・ポジティブ

ビジョン実現に向けた考え方：

センター・オブ・ヒューマニティ



【委員意見】

●ビジョンについて

- ・仙台の玄関口としての重要性や、様々な都市機能が共存する特性を的確に捉えており、非常に分かりやすく理解できた

●価値観、方向性について

- ・どちらも価値観になり、方向性になりうと思った
- ・キャッチーな言葉は必要だが、多すぎても問題だと思う
- ・カタカナを多用すれば現代感は醸し出せるが、高齢者や中高生には理解されにくくなる
- ・人の感情や人間性を中心に据えたエリアづくりという意図が明確に伝わった

●ビジョン策定後について

- ・ビジョン策定で終わりではなく、行政と民間が一体となり本気でこのエリアを実際に発展させていかなければならないと考える



令和7年（2025年）3月 最終案の提示・策定

エリアの果たすべき役割に関する補足

Data and References on the Area's Role.

社会実験のデータから、エリアの果たすべき役割を考える上で参考となる補足資料を掲載します。

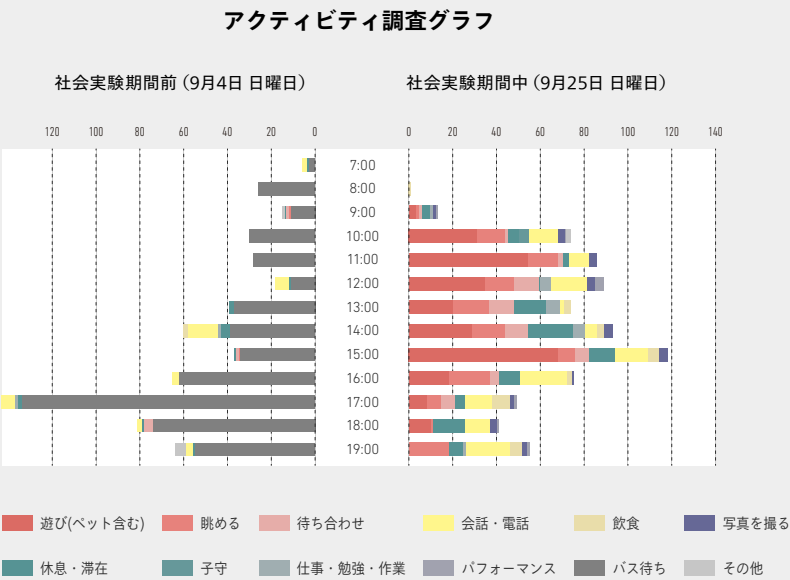
1

ひと中心の視点

「活動、交流、滞在」による「居心地の良さにぎわい」により、「仙台の顔」として表情を生み出すことができ、多くの人を惹きつけることができた。

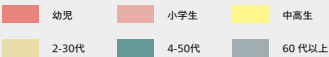
1. 活動数、種類の変化

- ・空間の創出、コンテンツの実施により、様々な活動を生み出すことができた
- ・休日のコンテンツ実施状況によっては、座る場所が不足する場合があった

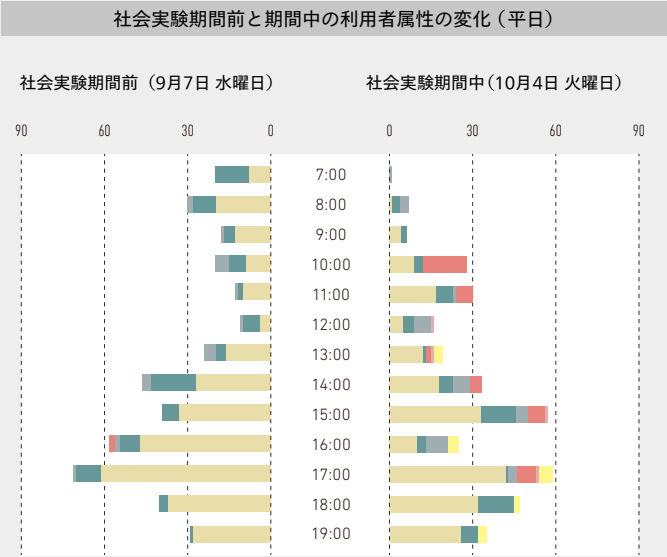


4. 来訪者属性の変化

平休日に関わらず、幼児や小学生などが増加し、来訪者属性に変化をもたらした

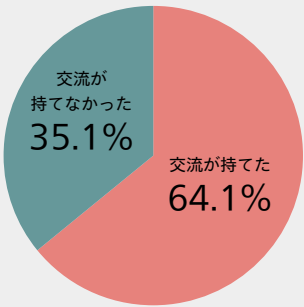


社会実験期間前と期間中の利用者属性の変化



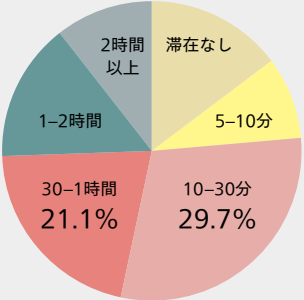
2. 交流の創出

交流体験を重視したコンテンツの実施により、来訪者の約6割が「交流を持てた」と回答 (N = 423)

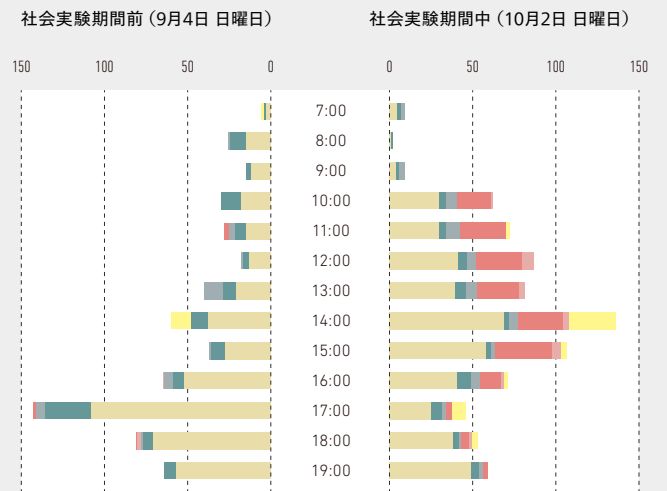


3. 滞在時間

来訪者の約半数が30分以上滞在 (N=1,145)



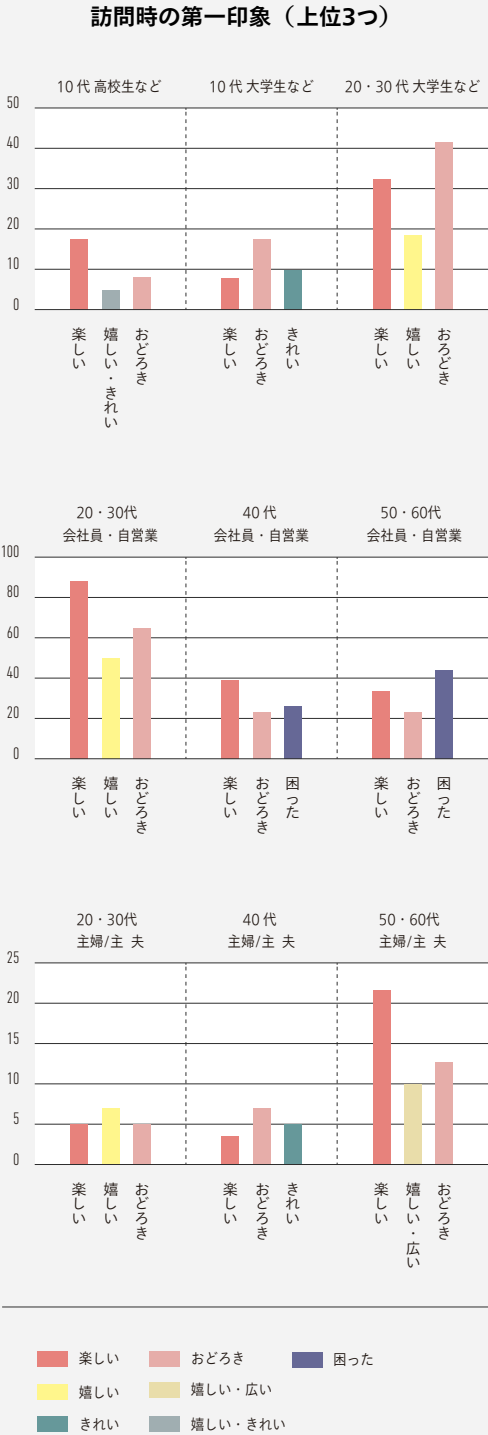
社会実験期間前と期間中の利用者属性の変化 (平日)



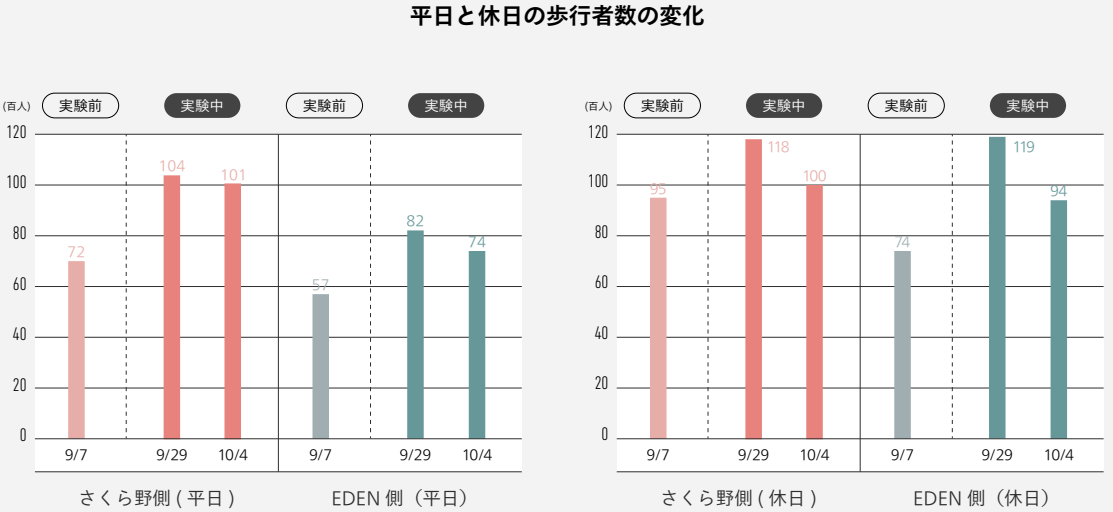
5. 来訪者の第一印象

「楽しい」、「嬉しい」、「驚き」など、第一印象として好印象を与えることができた一方で、渋滞などにより「困った」印象も与えた。

- * 本グラフは各層の上位3つの回答です。
- * 「大学生など」には大学院生、専門学生が含まれます。
- * 「高校生など」には高専生が含まれます。



「活動、交流、滞在」による「居心地の良い賑わい」により、沿道の一部飲食店舗では、連携した取組みの他、テイクアウト増加、休日の家族連れ、若い世代の来客が増加したことなどによる売上げ増加が見られた。



① 歩行者数の変化

さくら野百貨店側、EDEN側とも、実験前と比較して歩行者交通量が増加

② 青葉通に面する店舗への効果

- (飲食店)
- ・ 平日・休日を問わず、若い世代と家族連れが増加。
 - ・ 実験前と比較し、客数は30%、売上は昼30%、夜20%向上。
- (飲食店以外の物販)
- ・ 売上は増えていないが、来客数は増加

③ 青葉通に面していない店舗への効果

- (沿道施設内 飲食店 A)
- 「子連れのお客さんが増加し、売上も増加。」
- (沿道施設内 飲食店 B)
- 「人の流れが変わった。特にお昼は家族連れのお客さんが今までのほぼ倍。うれしい。」
- ※両者ともに交通混雑による客数の減少は見られなかった

④ 売上、来客数増加のためのポイント

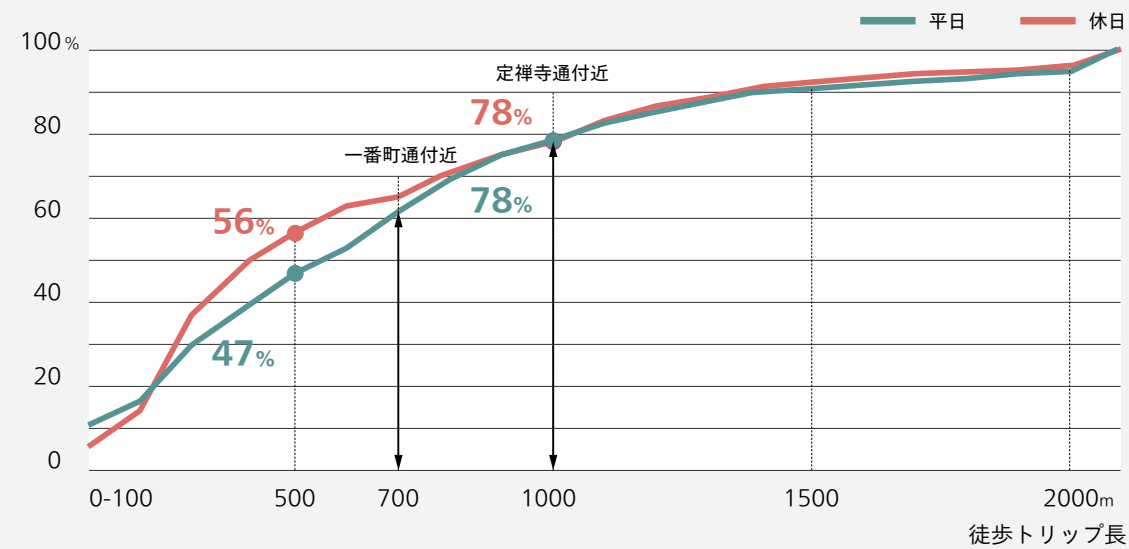
沿道店舗の飲食店 店長のコメントより

「売上、来客数向上のためには、店舗側として空間に訪れる方が必要としているサービスの提供、空間で行われている取組との共創が必要」

3 回遊の視点

このエリアは仙台駅東西自由通路やペDESTリアンデッキより一番町等のまちなかとの距離が近いことから、「活動、交流、滞在」を生み出す空間により多くの人を惹きつけることで、より一層回遊の起点となる役割を果たすことが期待できる。

仙台駅前を起点に歩く人の移動距離の50%は500m程度（仙台駅から東二番丁通までの距離に相当）



このエリアに来てもらい、滞在（休憩）できることで、移動距離の観点から一番町などのまちなかへの回遊はしやすくなる。社会実験中には「休めることで他のエリアに行きやすくなった」という意見も寄せられた。

青エリア | 仙台駅東西自由通路を中心とした半径500m

赤エリア | 青葉通駅前エリアの左端を中心とした半径500m



青葉通仙台駅前エリア未来ビジョン
仙台の顔、多彩な表情のあるエリアへ

発行日 2025 年〇月〇日

発行 青葉通駅前エリアのあり方検討協議会

制作 青葉通駅前エリアのあり方検討協議会 将来ビジョン検討事務局

ディレクション・デザイン 小松 大知 (TORCH)

編集・イラストレーション 奥口 文結 (FOLK GLOCALWORKS)

写真

佐藤 早苗 (sanas photo works)

佐藤 正実 (風の時編集部)

難波 明彦 (ティーラムスタジオ)

印刷 今野印刷株式会社

未来ビジョン策定 2025 年 3 月

—

＊冊子中の施設名称は、社会実験開催時点（2022 年 9 月）の名称で記載しています。

＊グラフ出典

－ 青葉通駅前エリアのあり方検討協議会資料

－ MOVE MOVE ARCHIVE BOOK

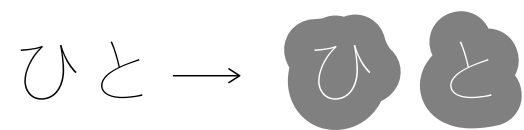
－ 第 5 回仙台都市圏パーソントリップ調査 報告書



AOBA DORI MOVE



青葉通駅前エリアの公共空間のあり方検討
(仙台市ホームページ)



表紙のデザインについて

未来ビジョン「センター・オブ・ヒューマニティ」を受けて、ひと（ヒューマニティ）が中心となって、エリア一体に広がり、重なり、連なってていく様子を、「ひと」というひらがなが大きく膨らんだ形を使って表現しました。まちづくりのあり方を固定化させず、ひとの持つ五感や感覚的な目に見えないものを含めたまちづくりになることも（一見）抽象的な形によって表現しています。

CENTER

OF

HUMANITY